

平成 23 年度

英語教育アドヴァンスト研修

授業改善プロジェクト 報告書

—アクション・リサーチによる高等学校英語授業の実践—



神奈川県立国際言語文化アカデミア

はじめに

神奈川県立国際言語文化アカデミア 所長
三國 隆志

夏目漱石の『吾輩は猫である』に登場する苦沙弥先生は、中学校の英語の「リードル」を担当する語学教師であった。また、『三四郎』に登場する「偉大なる暗闇」たる広田先生は、旧制一高の独逸語教授であった。漱石をふくめて当時の語学教師たるこれらの人々の特色は、薄給に甘んじ白墨にまみれ生徒や学生どもに語学を教えるはいても、彼らの博覧強記は限界がなくその教養は底が見えぬほど深かったことである。自然の赴くところ、学問と教養ある人士が彼等の周辺に集まり、将来にその道の大家となる教え子が蝟集する結果となった。語学教師で一生を終えることも、貧窮さえ覚悟すれば、悪くはない話であった。自由闊達に学問世界を逍遙できる生活を営むことができるし、そこには生活の充実というものがあったからである。では、現代の語学教師はどうなっているのか？

戦後、英国は脇に迫いやられ米国の言葉と文化がわが国に流入し、文化的価値観や個人の人生観にすら甚大な影響を与えた。英語教授法は即席の街の英会話教室の教授法から高遠な学術理論に依拠する教授理論にいたるまでそれこそ汗牛充棟ただならぬほどとなっている。大学を卒業したからといって、また外国での滞在が長かった日本人子弟であるからといって語学力に期待すれば裏切られるのが相場であろう。中学校や高校は言うに及ばず、大学の教養課程の英語クラスを覗いてみればよい。読めず、書けず、聞けず、話せずの学生が鬱々として机に座っている情景は心痛むほどである。教えている語学教師のシジフォスに似た虚しい努力もまた。書物を読む時間もなく、校務に追いまくられ、一番大切な授業や生徒のことをじっくりと振り返って考えることもままならないのが、いまの語学教師である。秀才の教え子なども遊びに来る暇はない。苦沙弥先生の世界は永遠に滅んでしまったかのようである。

神奈川県立国際言語文化アカデミアにおける英語教員研修は、参加する教員が、みずからの潜在的な能力を引き出し、指導力向上のための理論を学び、よりよい授業実践を考えるための場であるが、いま最初の年度の「授業改善プロジェクト報告書」が提出された。めでたいことである。研修を担当するスタッフは長く現場を踏んできた日本人・外国人教員であり、現場での教員の苦悩を知り尽くしている。人間が人間を教えるという作業は、医者が患者を癒す、宗教者が道に行き悩む者に光を与えるのと同じく、簡単なことではない。医者 of 絶妙な匙加減、宗教者のまさに機を見ての容赦ない相手への一言が相手を活性化すると同様の微妙な作業なのである。機械的にできることではない。研修という場では、参加者は厳しく自分を革新しようとする。各人のその努力を無駄に終わらせることなく、和気藹々の切磋琢磨の裡に、教員として自己革新することをお手伝いするのがアカデミアの役割だと思ふ。戦後の初代神奈川県知事であった内山岩太郎氏はいまの総合教育センターをつくり上げた人物であるが、彼の座右の銘をアカデミアにもお借りしたいと思ふ。曰く「和気洋々」。そのようなひろやかな心が存在しなければ、教育も研修もできはしないからである。

目 次

「英語教育アドヴァンスト研修」とは	1
「教師が変わり、生徒が変わる授業」を目指してー授業改善プロジェクト	3
「学習意欲」にかかわる指導	
生徒を振り向かせる言語活動と授業デザイン	5
ICT の活用による授業の活性化と基礎・基本の指導	9
音読活動の工夫による授業の活性化	13
家庭学習を促し、達成感を与える教材作り	17
生徒の意欲と自信を向上させる音読指導	21
e-learning を活用した自律学習と協同学習	25
「語彙」にかかわる指導	
基本語彙定着のための基礎練習と応用練習	29
語彙の定着を促す提示の工夫と覚え方の指導	33
語彙力増強を目指した教材活用と言語活動	37
「読むこと」にかかわる指導	
読解問題に対応する力を伸ばすための言語活動	41
生徒の意欲と自信を向上させるリーディング指導	45
速読力を高める基礎練習とリーディングタスク	49
速読力向上を目指した語彙指導と読解指導	53
長文読解のためのリーディングストラテジーの指導	57
「書くこと」にかかわる指導	
自作評価スケールを活用した自由英作文の指導	61
英作文の力を伸ばす英文日記の活用	65
自由英作文につながる文構造の段階的指導	69
段階的リーディングタスクの後の自己表現活動	73
「授業で英語を使うこと」にかかわる指導	
多様な言語活動による「英語で進める授業」	77
英問英答から始める、生徒の発話を促す授業	81

*それぞれの実践レポートの内容については、言語活動の呼称などに関し、厳密な用語の統一はしていません。

英語教育アドヴァンスト研修とは

○ 英語教育アドヴァンスト研修のねらい

英語教育アドヴァンスト研修は、神奈川県で中核的役割を担う高等学校英語科の先生方に専門性の高い研修の機会を提供することを目指し、県教育委員会との連携のもと、国際言語文化アカデミアで平成 23 年度から開講されました。

集合研修 9 日（前期 2 日、夏季 3 日、後期 4 日）、勤務校での授業研究 1 日（前期半日、後期半日、年間 2 回の研修スタッフによる授業訪問）から構成される合計 10 日のプログラムは、「多文化共生、異文化コミュニケーション」、「英語教師の専門知識、英語による発信力」、「授業研究、授業改善」を三つの大きな柱としています。

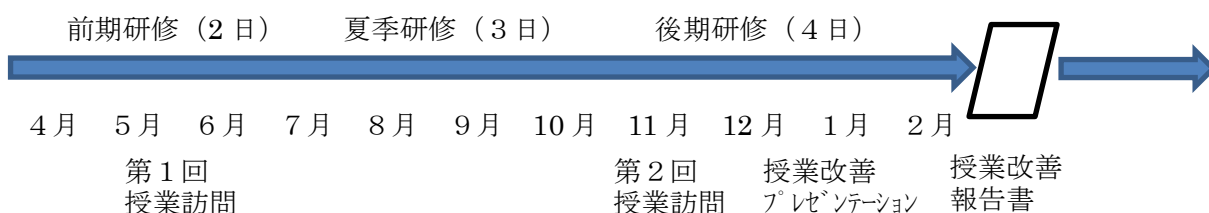
<p>Objective 1</p> <p><u>Multicultural Awareness</u></p> <p>英語教育において多文化共生、異文化コミュニケーションを扱うことの意義について意識を高める。</p>	<p>Objective 2</p> <p><u>Expertise in English</u></p> <p>英語による発信力、および英語教育・言語習得理論の実践への活用力を磨く。</p>	<p>Objective 3</p> <p><u>Reflective Teaching</u></p> <p>みずからの授業を客観的に分析し、他教員の実践からも学びながら改善へと結びつける省察力を磨く。</p>
--	---	---

平成 23 年度は、20 名の参加者が、高度な言語知識・技能およびそれらを基盤とした指導力を身につけ、他の先生方とも協力してよりよい英語教育に貢献すべく 1 年間の研修を行いました。

参加者の先生方は、年齢や経験年数は多様ですが、英語教育にかける思いは同じように熱く、限られた研修・研究時間のなかで最大限の努力をされていました。

○ 研修成果を活かす場としての授業改善プロジェクト

研修内容は教室でのよりよい授業実践、生徒の英語力向上へと結びつかなければなりません。しかし、教師であれば授業改善の複雑さ、難しさは身をもって経験しています。そこでアドヴァンスト研修では、集合研修において多文化共生への意識、英語力、英語教育に関する専門知識を高めながら、勤務校では継続的に授業改善に取り組むことができるように授業改善プロジェクトを取り入れています。



研修最終日（1月）には、本報告書の基礎となった授業改善プレゼンテーション（英語）が行われました。先生方が授業改善の試みとして力を入れた授業実践には次のようなものがありました。

■ 指導内容（「何を教えるか」）の工夫

- ・新たな内容を取り入れたもの：単語記憶法／1文（3～7文）英作文／読解ストラテジー
- ・従来の内容の質を高めたもの：発音や音読の仕方／パラグラフの構造に関する知識

■ 指導方法（「どう教えるか」）の工夫

- ・教師自身の行動：教師自身が英語を使う／ICTを活用する／単語集を授業と関連づける
- ・目標の明確化：評価観点を明示する／WPM（1分間に読める語数）を計りながら読ませる
- ・環境整備：授業外でも英語を書く機会を与える（英文学級日誌、英文日記帳を与える）

■ 自主教材（「何を使って教えるか」）の工夫

- ・指導手順とのマッチング：段階を踏んだリーディング活動ができるハンドアウト
- ・活動の補助：個人やペアでの音読活動に役立つハンドアウト（空所つき本文など）
- ・家庭学習の促進：予習で何をすべきかが明確なハンドアウト

また、第1回訪問時と第2回訪問時の授業パターンを比べると、第2回では、a) 生徒中心の活動、b) 復習や定着のための活動、c) 生徒が英文を書く活動、d) 生徒が考えて答える活動、e) ICTを活用した活動が新たに取り入れられているケースがみられました。

○ 報告書作成の目的

本報告書の目的は三つあります。第一に、研修参加者がみずからの授業改善の軌跡を記述しお互いの情報を共有することで今後の授業改善のための共同体づくりに役立てること。第二に、報告書の内容を他の英語科教員と共有することで、授業改善に関するアイデア創出に資すること。第三に、高等学校英語教育の課題やそれに対する現場の取組状況を公表することで、英語教育や教師教育にかかわる研究者の今後の研究に資することです。

お読みになる際は、以下の本報告書作成・編集方針をご理解いただけるようお願いいたします。

授業改善プロジェクト報告書作成・編集方針

1. 授業に参加している生徒の個性や尊厳を尊重し、生徒は皆それぞれの可能性をもっているとの認識に立つ。
2. 学校や生徒の状況について読者に参考となる情報を記述する。
3. 実践結果については、当初の目標の達成如何にかかわらずその結果を記述する。
4. 授業改善のプロセスやストーリーが読者にわかるように記述する。
5. データ処理や分析については将来的には厳密さを目指したいが、本報告ではあくまで授業改善の一助として位置づける。

本研修の実施および本報告書の作成にあたっては、過去の文献や研究成果、私たち研修担当者自身がお世話になった諸先生方から多くの知見をいただいていることを申し添えます。

「教師が変わり、生徒が変わる授業」を目指して－授業改善プロジェクト

○ 授業改善プロジェクトの流れ

授業改善プロジェクトは次のような手順で進められます。

1. 自分の授業スタイルの振り返り

授業で行っている個々の活動の目的と効果、活動のつながりを改めて考えることで、英語教師としての思いと実際の指導方法の整合性を確認します。これにより、自分の授業を客観的に分析するということを体験します。

2. 授業における課題の発見

現在担当している科目の一つについて、どのような課題・問題があるか、教師の思いと授業の実情にどのような食い違いがあるかなどを、思いつく限り挙げてみます。

(例) 英文読解に終始してしまい生徒に自己表現をさせていない。

音読をしっかりとさせたいが声も小さくなかなか盛り上がらない。

3. 改善すべき課題の確定

上で挙げた課題のうち、改善可能で優先順位の高いものを一つまたは二つ選びます。

4. 生徒の現状把握

確定した課題に関連する生徒の学習態度や英語力・技能などを、質的・数量的に調査します。

(質的データの例) 生徒の英語学習に関するコメント、教師による学習観察記録

(数量的データの例) 標準テストの得点、推定語彙サイズ、発話語数

5. 改善目標の設定

現状把握に基づき、どれくらいまで改善したいかを数値目標を掲げて設定します。

(例) 大きな誤りのない7文以上の英文で自己紹介が書ける生徒がクラスの8割以上になる。

6. 目標達成のための手だての決定

目標を達成するために、授業でどのような指導を行うかを決めます。その際、それぞれの指導事項や言語活動にどのような目的や効果があるのかを明らかにしておきます。

(例) 新出語彙の導入に画像や映像を活用すれば、記憶の助けになり語彙の定着がしやすくなるだろう。

7. 生徒の変化の検証と教師自身の振り返り

原則的に事前の現状把握で用いたものと同じ手法で、生徒の変化・向上を検証し、改善目標が達成されたかどうかを調べます。また同時に、この一連の取組を通して「生徒の見方」「授業のデザイン」「教材の扱い方」などについて、教師自身がどのように変化したかを省察します。

8. 報告

同様の課題を抱える教師仲間との情報交換、勤務校や地区での情報提供に役立てるために、レポートを作成します。ここで再度、今回の授業改善の内容・手法を振り返るとともに、今後の課題について考察します(研修最終日に英語による口頭発表も行います)。

○ 生徒の変化

さまざまな学校でさまざまな生徒と向き合っている先生方の実践から、今年度は下のような「生徒の変化」がみられました。限られた期間での取組のなかで、設定が高すぎて目標が達成されなかったというものもありましたが、質的に、数量的に、あるいは両面で、確実に生徒の学習意欲や英語の力は向上しています。このプロジェクトで明らかになった向上を教師と生徒が共有し、一緒にさらなる目標に向かっていくことができれば、より活気のある授業、教師と生徒が元気になれる授業が実現するでしょう。

(例) 生徒の英語嫌いの克服、学習意欲・達成感の向上、音読への自信の向上、自律学習の確立、語彙サイズの向上、英作文を書く力の向上、生徒の英語発話量の向上、読解力の向上

○ 教師の変化

このプロジェクトでは、「この授業改善を通して教師自身がどのように変わったか」ということも重視しています。授業における課題は教師が動かなければ解決しません。生徒、指導法、教材などに対する新たな視点をもたなければ、現状は変わらないでしょう。今年度受講した先生方からは、次のような「教師の変化」が出ています。

- (例) ・口頭での指示や説明を英語で行う機会が増えた。
- ・少しずつ自分の指導法が形づくられていくのが実感できた。
 - ・授業で行う一つひとつの活動の意味を改めて考えさせられる機会になった。
 - ・教師の思いが生徒と共有できているということの難しさ、大切さを実感した。
 - ・生徒にゴールを明確に示すようになり、評価方法もより深く考えるようになった。
 - ・以前よりも生徒をほめるようになった。
 - ・大きな成果のための「変化に対する勇気」を身につけた。
 - ・ポイントを絞って調査をすると、生徒の力の伸長が明確化することを学んだ。
 - ・アンケートで生徒のニーズをつかむことで、導入／継続すべき活動がわかり自信がもてた。
 - ・自分の英語力を高める必要を感じ、今まで以上に英語力の向上に努力するようになった。

さらに、改善のための手だて（指導法や言語活動）やデータ分析の方法を考えるために、他の教師と情報交換をしたり、文献にあたったり、学会や研究会に参加したりするなど、積極的に取り組む先生方の熱意が感じられました。

○ “Teacher as a Researcher” の意識とスキル

「自分が教わったように教える」「目の前の教材をあるがままにこなす」「はやりの言語活動を切り貼りする」というやり方では、うまくいかないことがよくあります。教師の直観や伝統的なやり方にもよさがありますが、生徒の質的・数量的ニーズを調べ、その客観的データに基づいて、生徒とゴールを共有しながら（変化をともなう）意思決定をしていくという意識やスキルは、プロである教師の成長に不可欠であると考えます。この授業改善プロジェクトに取り組んだ先生方が、仲間を増やしながらか、よりよい授業を追求するプロ集団をつくり上げていくことを期待しています。

生徒を振り向かせる言語活動と授業デザイン

科目名	英語Ⅱ	学年	2	形態	HR・習熟度・小集団
-----	-----	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

男女比はほぼ半々、若干女子が多い。男女ともに元気のよい生徒が数名おり、授業中により反応を返してくれることもあるが、クラスのリーダーシップをとるような存在ではない。全体的に無邪気な感じの生徒が多い。

解決すべき課題

授業への取組にむらがある生徒が多く、集中できないことがよくある。ワークシートへの記入など、作業的なことは比較的集中してできるが、人の話を聞いてそれをもとに考えたり、まとめたりすることは苦手である。興味、関心のもてないことに対してはあきらめてしまう傾向が強い。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

5月の前期中間テスト終了後に行ったアンケートの結果では、「英語を勉強することがとても好き」「どちらかというが好き」を合わせて32%、「どちらかという嫌い」「嫌い」を合わせて66%という結果が出た。また、「英語の授業が楽しい」「まあまあ楽しい」を合わせて47%、「あまり楽しくない」「つまらない」を合わせて53%であった。

中間テストの平均は68点、37名中、80点以上が12名、40点未満が3名であったが、期末テストでは平均が60点、80点以上が9名と減少する一方で、40点未満が7名と増加し、以降この傾向は続く。授業中に実施している単語テストでも、回を増すごとに取組が悪くなっていることから、英語の授業や学習に対する関心が徐々に薄れていることがうかがえる。

改善の目標

- ・授業に注意を向けている生徒が全体の9割以上になる。
- ・生徒の7割以上が英語の授業を肯定的に捉えている。

改善のための手だて

- ・ペアワークやグループワークを導入し、授業のなかで行う活動のバリエーションを増やす。
- ・パズルやゲーム的な要素を含む活動をする。
- ・リスニング活動によって生徒の集中力を高める。
- ・課題を提示し、その解決に取り組むことによって、生徒が主体的に活動する時間を設ける。
- ・基本的（単純）な事項から応用的（複雑）な事項へ段階を追って指導する。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・音読の練習をペアで行った。また、練習方法のバリエーションを増やした。一文ずつ交互に読んだり、片方が先生役になって読みそのあとを生徒役がリピートしたり、あるいは時間制限を設けたりした。さらに、ペアも固定せず一回読むごとに変えるようにした。多くの生徒は単なるコーラスリーディングよりもしっかり音読するようになり、比較的楽しんで活動していたようだが、なかには積極的に取り組もうとしなかったり、手を抜いたりする生徒がだんだん増えてきた。授業時間との絡みもあり、しだいにこの活動は下火になってしまった。
- ・テキスト本文に出てくる単語（新出単語に限らず）の導入にフラッシュカードを使っていたが、それだけではなかなか定着しないので、クロスワードやワードサーチ、ワードスクランブルといったパズルを使い、同じ単語を何度も書かせたり、答えを発音させたりするようにした。さらにテキストの音読を聞かせながら、単語の穴埋めをさせる、テキスト内にわざと間違っている単語を忍び込ませておいてそれをみつけさせる、などといったリスニング活動を含む活動を行った。生徒はこういった作業的な活動にはとてもよく取り組む。答えになる語彙もすでに提示されており、結果的には選択問題と大して変わらないので取り組みやすいのかもしれない。とにかく同じ単語に何回も触れることによって、習得するチャンスを増やそうという発想である。特にテストなどの検証をしたわけではないので、その目的を果たしたかどうかは客観的には明確ではないが、授業のなかで教師が単語について問いかけるのに対して生徒の反応がよくなったようには感じる。少なくとも生徒が集中して取り組む時間をつくるという点では成功していると思う。
- ・テキストの題材に関する下調べをさせた。ウェブサイトを利用して生徒が自主的に調べることができれば理想的であるが、PC 教室の空き状況やアクセス速度の安定度の関係でやはり紙ベースの資料に頼らざるを得なかった。また、どのような点を調べればよいかわからない生徒が多かったので、前もってワークシートを配布し調べるポイントをいくつか提示した。資料には前もって目を通しておき、記載されている情報がそのまま調べるポイントの答えになるように工夫した。それは複数の資料から自分で答えをまとめ上げることは生徒にとってまだ難しいからである。この活動も基本的には作業であるので、生徒の取組はよかった。答えも探しやすい工夫してあるので、難しすぎて投げ出してしまうような生徒はいなかった。
- ・以上のように、90 分間の授業時間中にさまざまな活動を導入して何とか生徒の関心をつなぎとめる工夫を試み一定の成果はみられたが、語彙指導、音読指導、テキストへの導入以外の部分、すなわち内容理解や文法指導などの部分に関しては手が及ばず旧態依然たる授業になってしまい、そうした場面になると授業に注意を向けない生徒の割合が増えてしまう結果になった。
- ・「授業に注意を向けている」状態の定義が難しいが、今回は「授業時間内 を通じて1度も机に顔を伏せたりしなかった」ことを基準に生徒の人数を数えた。9月20日から11月25日までの10回の授業での結果は次のとおりである。

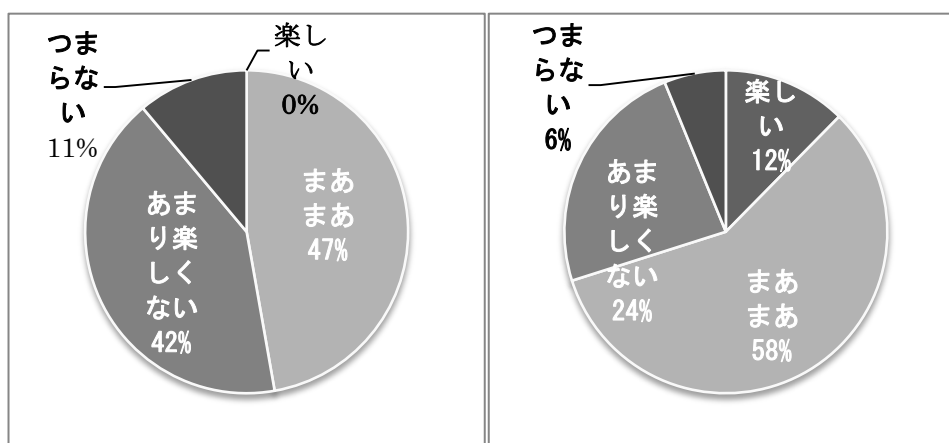
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	平均
28	27	32	35	31	35	29	34	36	31	31.8

(単位:人)

クラスの在籍数は 37 名であるので、平均してクラスの 86%の生徒が授業に注意を向けていたことになる。

- ・ 2 回目のアンケートの結果から生徒の約 70%が授業を好意的に受け止めていることがわかったが、上述したような授業中の生徒の様子から考えると果たしてその数値にどの程度の妥当性があるか疑問に思わざるを得ない。授業そのものの評価だけでなく生徒と担当教諭との人間関係に対する評価が含まれているようにも感じられる。教科学習に対して興味・関心が不十分であり、その結果授業に集中できない生徒は、授業のなかで教科の内容そのものよりも教師という存在を最も意識していると思う。つまり、自分のことを認めてくれていると感じられる教師に対しては概ね協力的になり、教科の好き嫌いにかかわらず授業に（というよりは担当教諭に）積極的に関わろうとするものだ。授業時間のみならず学校生活を通じて、生徒とさまざまなやり取りを繰り返すなかで、生徒との信頼関係ができればできるほどそれは授業の展開にも反映してくるものだと感じている。今回のアンケートの結果についても、4 月の授業開始から半年以上が経過すればそれなりの人間関係はできるもので、そうした点が評価にかなり反映されているのではないだろうか。

(参考資料) アンケート：「英語の授業は楽しいですか。」



第1回 (2011年5月)

第2回 (2012年1月)

教師の変化

- ・ 生徒の関心を惹起する工夫はおそらく永遠のテーマであり、各教師が最も苦勞するところであろう。成功した方法でも学校やクラスが変わると必ずしもうまくいかなかったりするのでなかなか大変である。新しいやり方を考えたり、以前のやり方を改善したりしなければならない。そうしたなかで個々のもっているアイディアの引き出しには当然限界があり、他の教師との情報共有が不可欠になってくる。同僚との意見交換や授業見学、さまざまなメディアを含む外部からの情報獲得に積極的に取り組むよう心がけている。
- ・ 当然のことながら、日々の授業を行っていくうえで生徒との人間関係の形成は最重要課題であるので、授業時間のみならず、学校生活のあらゆる場面で生徒と共有する時間をもつように努めている。

今後の課題（次の改善点など）

- ・ただ単に活動のバリエーションを増やすだけでなくそれをいかに有機的に構成していくかが大きな課題である。今回は音読の活動、語彙指導の活動それぞれに費やす時間が多くなってしまい、他の種類の活動にうまくつなげていくことができなかった。活動の種類を増やすこと自体が目的化してしまったので、一つの単位時間内に別々の種類の活動をうまく組み合わせることができるようになりたい。
- ・読解内容把握や文法指導の場面でも生徒の関心を引き起こすような工夫を考えていきたい。
- ・工夫を施せば施すほど教材を作る手間が増えてしまう。過去に使用した教材でも手を加えないと使えないことが多い。現在の学校現場の状況では教材作成に集中できるまとまった時間を見つけることは至難の業である。ましてや毎日の授業に備えてそうした時間を恒常的に見つけ出すことは困難である。したがってせつかく考えだした活動も、教師に余裕のあるときにだけ実践されたり、時にはワンショットで終わってしまったりするなど、日常の授業展開に反映できないことが多い。

まとめ・感想

学習に対する意欲が不十分な生徒をどのように指導していくかは、英語に限らずどの教科でも永遠の課題である。どんなに英語に精通していようとも、どんなに素晴らしい指導技術をもっていようとも、まず生徒にやる気を出させなければ意味がない。生徒の気持ちを動かすのはやはり生徒との信頼関係であろう。彼らは成功体験が少なく、常に認められたいという思いをもっているため、教科指導をする以前に彼らの気持ちを解きほぐすことが必要である。それは授業のなかだけではなく、学校生活のあらゆる場面にその機会が転がっている。それを利用してまずは「私は敵ではない」というメッセージを送り続けること、そして受容してもらうことが授業につながっていくと思う。そういう意味では我々は、英語の教師である前に、一人の教師であり、さらには人間であるのかもしれない。さらに、我々が教室で教えるべきことは英語そのものだけでなく、他のこと（例えば達成感とか集中力とか）なのかもしれない。

ICT の活用による授業の活性化と基礎・基本の指導

科目名	リーディング	学年	3	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

理系科目を選択している生徒が多く、男子が 70%を占める。進路については半数以上が指定校推薦等で決定している。全体的には授業中は静かな印象のクラスである。

解決すべき課題

目標をもち、意欲的に学習を進める生徒がいる一方で、学習そのものに意欲がなく、授業に積極的に参加できない生徒が少なからずいる。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・本校入学以前から英語に強い苦手意識をもつ生徒、または英語を学習する目的や必要性がないと感じている生徒のほかに、進路がほぼ決まりかけて勉強することに意欲を失っている生徒もいる（観察、面談、アンケートより）。
- ・もともと家庭学習の習慣がない生徒や、どのように授業を受ければよいかわからない生徒がいる（観察、面談、アンケートより）。

このような生徒が「楽しい」「もっと学びたい」と感じられるような活動を授業に取り入れる必要がある。

改善の目標

- ・「授業が楽しい」と感じる生徒をクラスの 7 割以上にする。
- ・「授業の半分以上の時間集中して取り組んでいる」と感じる生徒をクラスの 7 割以上にする。

改善のための手だて

- ・ポッドキャストや動画、スライドショー等を簡易に行い、スクリーンに映し出すことのできるタブレット端末を導入すれば、前方を注視する時間が増え、授業により集中することにつながるだろう。
- ・同じように、タブレット端末を導入すれば、視覚に訴えるため、ゲーム等に慣れた生徒たちの間に何となく「授業が楽しい」という感覚が生まれるだろう。
- ・毎回授業の冒頭で文法や語法の基礎的な力を充実させるトレーニングを行えば、実力がつき、授業が「わかる」ことから「楽しい」と感じられるようになるだろう。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

< 9月の取組 >

英検3級レベルの問題演習を行うことができる自作ハンドアウトを毎回の授業で1ページずつ行うことにした。またタブレット端末を「単語の導入」「ポッドキャストのリスニング」「スライドショー機能を活用した文法項目の説明」などの場面で活用し始めた。

< 生徒の反応 >

タブレット端末は目新しく映ったようで、それを使用している時間には多くの生徒が前を向いていた。またトレーニングを「難しい」と感じているような生徒がみられたため、点数を成績に直接反映させることはなく、提出状況を平常点に加味するので、かならず問題に取り組み、答え合わせをして、裏面に授業中の感想やわかりにくかった点などを書いて毎回提出するように、何度も全体や個別に指導した。

< 10月～11月の取組 >

中間テストの時点で、タブレット端末による教材提示と授業冒頭のトレーニングについてどのように感じているかをアンケート調査したところ、ほとんどの生徒がどちらについても「このまま続けてほしい」との意見を表明した。ただしタブレット端末を使った音声のリスニングや文法項目の説明については「かえってわかりにくい」との意見もいくつか聞かれた。またスライドがどんどん切り替わるため、「いつ黒板の内容を写せばよいかわからないうちに終わってしまい、やる気がなくなる」というような意見も聞かれたため、単語関連の活動においてのみ活用することにして、生徒が活動に集中しやすくなるよう以下の工夫をした。

- ・タブレット端末使用時のワークシートは単純な形式にし、ハンドアウトに書き取る内容等は黒板に書いて示す。
- ・生徒が「授業が全部わかった、取り組めた」と感じられるよう、タブレット端末で扱う内容を精選し、発展的な内容等は別の活動で取り扱うか、補助ハンドアウトで提供する。
- ・写真（コンテンツ）の出し方を工夫し、生徒が発言したくなるような要素を盛り込む。

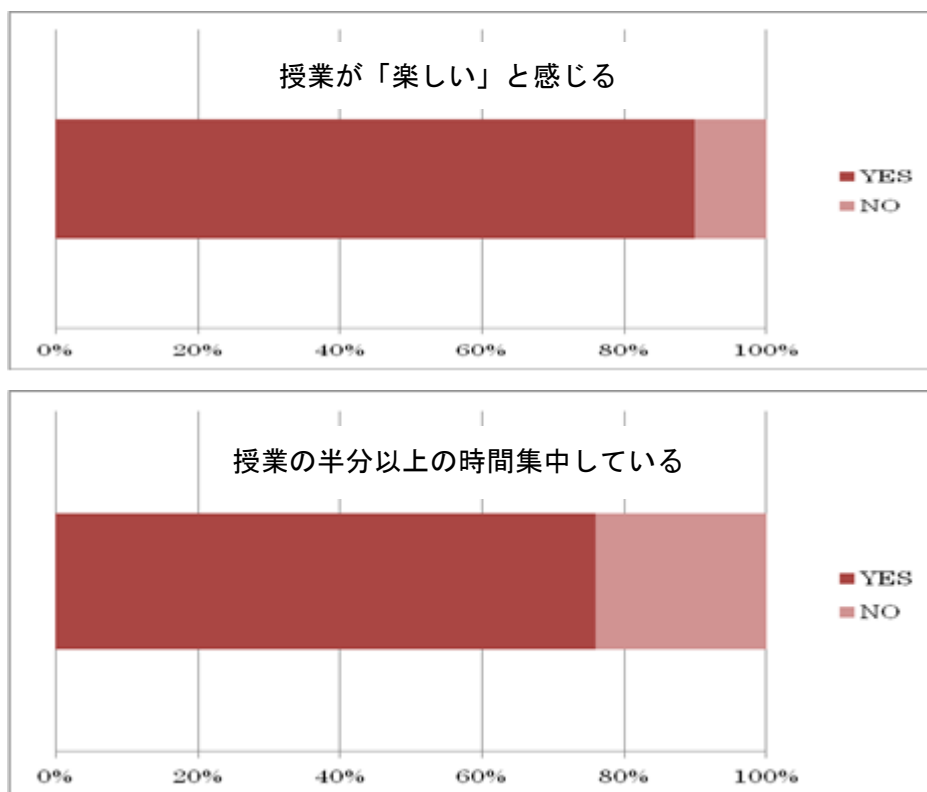
また冒頭のトレーニングは「10分間トレーニング」と呼び、生徒の要望に応じて解答を配布するほかに、口頭でも内容を補って解説するようにし、ハンドアウトの配布から生徒自身の答え合わせまでが毎回10分に収まるようにした。また裏面に振り返りを書かせることについても様式を印刷して、より生徒が授業中の気持ちを表現しやすくなるようにした。

< 生徒の反応 >

「10分間トレーニング」が定着し、ハンドアウトを配り始めると教室全体が静かになる。両面自分できちんと取り組んで提出する生徒が毎回9割以上になってきた。裏の感想でも「よかった」「悪かった」というような表面的な記述は減り、自分なりにこれまでのトレーニングの成果などと比較対照し、どのようなところが勉強すればより高得点になるかということを追及しようとしている姿勢が見て取れるようになった。「これまでの実力の蓄積から、授業の他の場面でも『わかる』と感じることが増えてきた」「これからも続けたい」等の前向きな感想もみられるようになってきている。

<事後の検証結果>

期末テスト返却時にアンケート調査を実施したところ、授業が「楽しい」と回答する生徒はクラスの 9 割、「授業の半分以上の時間集中して取り組んでいる」と感じる生徒がクラスの 8 割弱であった。それぞれの YES の理由として複数の生徒がタブレット端末や 10 分間トレーニングの導入を挙げている。



教師の変化

「生徒に真剣に授業に臨ませたいなら、まず自分は 100%の準備で授業に臨まなければ」と、「完璧」な授業を目指して、毎回の授業を行ってきた。しかしその気持ちは結果的にうまく生徒に伝わっていなかったと思う。今年は新しいことに挑戦し、準備不足や機材のトラブルで思ったとおりの活動にならないことも多かったが、それでも後半に向かうにつれ、より深い学習につながる発言や質問が寄せられるようになり、またタブレット端末を使用している場面以外でも顔を上げて授業に積極的に参加する生徒が増えたことで励まされた。「どうすれば、よりわかりやすくなるか」ということを教師が常に考え、試行錯誤する姿を生徒に見せることは、生徒を奮起させる強いメッセージになるとわかった。

今後の課題（次の改善点など）

- ・ 10 分間トレーニングの活動内容に広がりをもたせる。
- ・ リスニング等の活動において、タブレット端末を効果的に使用方法を考える。
- ・ 生徒が授業のどのような場面で「楽しい」「わかる」と感じるのかをより深く考察し、動機づけの活動設定に活かす。

まとめ・感想

今回の取組では、『授業が楽しい』と感じる生徒、『授業の半分以上の時間集中して取り組んでいる』と感じる生徒をそれぞれクラスの7割以上にするというふたつの目標を設定し、主に10分間トレーニングの導入とタブレット端末の活用を主な手だてとした。結果として概ね9割の生徒が「授業が楽しくなった」と感じており、また7割以上の生徒が、「授業の半分以上の時間に集中して取り組んでいる」と回答した。この結果からわかったことは次のとおりである。

- ・生徒が楽しんで授業に取り組むようになるためには、内発的な動機が重要である。
- ・受験等の達成目標がない生徒や特に英語に強い関心のない生徒、または学習習慣が定着していない生徒に、取り組みやすくわかりやすい「楽しさ」が感じられる活動を設定すれば、内発的な動機が生まれる可能性がある。
- ・「楽しさ」は「自信」につながり、それが内発的な動機をより強いものにする。

私は、生徒たちに、「授業を大切に、興味関心を広げてもらいたい」「自分から学習できる人材になってほしい」と願いながら日々の授業をしている。この気持ちを伝えるためには、直接それをメッセージとして発するだけでなく、生徒が「もっと学びたい」「学習しやすい」と感じられる環境を整えることが非常に大切だと今回の研修全体を通じて痛感した。

音読活動の工夫による授業の活性化

科目名	リーディング	学年	3	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

38名（男子16、女子22）のクラスで、ほどよく真面目で、ほどよく打ち解けた雰囲気がある。英語の基礎力はやや不足気味であるが、学習意欲は十分にある。一部、英語についての興味関心が高く、力をつけてきている生徒もいる。ただし、多くの生徒がAO入試や推薦入試による進学を希望しているためか、「高校でよい成績をとる」ことに目がいきがちであり、英語を学ぶことも基礎・標準的な内容や、教科書の範囲内の学習にとどまりがちである。

解決すべき課題

- ・授業の進め方に変化が乏しく、講義中心の授業になってしまっている。
- ・生徒が発言する機会を増やしたい。生徒が授業中に英語を使う時間を増やしたい。
- ・授業への参加意欲を高め、自主学習の契機となるようなタスクを提供したい。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・課題設定に到る7月までは、訳読中心のオーソドックスな英語の授業を実施していた。手順としては、次のとおりである。
 - ① 新出語句の発音と意味の確認
 - ② 本文の読み聞かせ
 - ③ 本文のコーラスリーディング（リッスン&リピート）
 - ④ 発問と板書による本文の意味確認と文法解説（生徒はノートに記入）
 - ⑤ 演習問題とまとめ
- ・生徒にとっては「定期試験で好成績をとりやすい、わかりやすくまとまりのある授業」として評価されていたようではある。しかしながら、成績を上げるためではあっても、英語そのものについての興味関心や学習意欲を高めるような授業となっていなかったのも事実である。
- ・1学期の授業についての印象を尋ねたところ、「英Ⅰ、英Ⅱの延長みたいで、授業に入りやすかった」、「普通によかった」、「ノートが書きやすかった」などの、当たり障りのないコメントが散見された。

改善の目標

「リーディングの授業が楽しい」という生徒がクラスの5割以上になる。

改善のための手だて

ワークシートによる音読活動の工夫

- ・教科書本文にスラッシュを入れた、音読活動用のワークシートを配布する。
- ・ペアワークを基本とし、生徒同士が起立した状態で各種音読活動をすすめる。
- ・音読活動前には、本文の意味理解を行い、感情やニュアンスが表現できるように配慮する。
- ・音読活動後には、自己評価シートを記入させ、学習の振り返りと次回への動機づけを図る。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

（9月）

- ・初回の授業で、音読活動の取り入れを説明し、早速実施してみる。目新しさもあるだろうが、生徒からは、「オーラルコミュニケーションのようで楽しい」という感想が聞かれた。
- ・9月は学校行事などが多く、授業は7回だけとなり、音読活動を実施した授業はそのうち2回だけとなった。
- ・授業のペースは、1回の音読に対して2～3回の内容理解や文法理解および問題演習の授業、という進み方になった。
- ・音読活動により、本文の定着が以前よりも深まったようで、内容理解や文法理解および問題演習の授業がスムーズに進むようになった。

（10月）

- ・定期試験や出張時の自習等を除く9回の授業のうち、3回を音読活動にあてることができた。
- ・毎回、読み方を変えることで、音読活動自体への生徒の興味関心は保つことができています。音読活動を楽しみにしている生徒もみられる。
- ・一方で、音読シートをノート代わりに使って筆記学習が疎かになる生徒がみられ、また、音読の取り入れにより本文に触れる回数が増えたためか、内容理解、文法理解の段階で本文に対する「飽き」がみられた。

（11月）

- ・11回の授業を行い、3回を音読活動にあてることができた。
- ・音読活動はスムーズに進められており、当初の目新しさは減ってきたものの、生徒の間では授業を楽しくするための学習法、あとで勉強することがわかりやすくなる学習法として認知されつつあり、よい意味で定着してきた。

- ・依然として、筆記学習の停滞や、本文の新鮮さの減退などにつながる要素はみられるものの、注意喚起により、学習の質は保つことができている。

(12月)

- ・定期テスト後の授業で、事後アンケートを実施した。授業そのものについての感想や印象は音読取り入れ前後で目立った差異は認められなかったが、自由回答欄のコメントにいくつか音読活動を肯定するものがみられた。以下はその抜粋である。

★音読のおかげでだいぶわかりやすかった ★授業のスピードが上がったり、音読が増えたりして、少し新鮮だった ★よむのはよいと思う ★音読等をすることによって、内容を覚えやすかったです ★音読をすることによって、耳で覚えることもできてよかった ★音読はちゃんと読まなきゃ、と毎度じゃっかんきんちょうしていた ★最初に訳をとったからやりやすかった ★音読大切 ★OC の授業みたく、他人と英語で会話する(読み合う)ことは、とても新鮮味があって、良かったです

(コメントは原文のまま)

目標数値の客観的検証はできなかったが、観察したところでは、音読活動をはじめとして、生徒たちの授業中の活動に取り組む態度は明らかに変わった。毎時間の授業が笑顔と活気にあふれるようになり、目標値の5割よりもはるかに多くの生徒が授業を楽しんでくれている様子がうかがえた。

教師の変化

- ・通常のコーラスリーディングにさまざまな「音読活動」を取り入れることから授業改善が始まったが、それにともない授業全般の進度や内容が変化してきた。以前は「読む」「書く」が中心だったが、「話す」「聞く」が大きく加味され、授業の準備や組立にも相応の変化をつけられるようになった。
- ・生徒とのやりとりが増えた分、口頭での指示や説明を英語で行う機会が少し増えた。

今後の課題(次の改善点など)

- ・同じ文や文章を繰り返し音読することで、確かに英文についての理解などが深まったが、一方では繰り返しによって生じる「当該英文に対する飽き」を解消しなければならないと感じた。
- ・来年度の授業では、より精緻なアンケートによって生徒の気持ちやニーズを随時把握し、生徒自身にも学習状況を振り返らせながら、さらに一体感のある授業づくりに努めたい。

まとめ・感想

- ・受験を控えた3年生のクラスでの年度途中での授業スタイルの変更について、当初は不安を感じていた。しかし、実際に改善に取り組んだところ、自分自身も生徒の側も英語学習についての意識がよい意味で変化し、授業の活性化につながった。英語学習への動機づけという点で、生徒の受験勉強や進学準備についても間接的に貢献できたのではないかと感じている。
- ・今回の取組は、私にとって「はじめの一步」であり、貴重な体験となった。アカデミアの皆様や私同様に研修プログラムに参加した皆様に感謝申し上げたい。経験や年齢によって受けるべき研修の内容も違いが生じると思われるが、今回この1年間の研修は今の私にとって非常に有意義なものとなった。今後この種の研修を受講される方々のためにも、この事業が継続されることを希望する。

授業改善にあたって参考にした資料等

安木真一.(2010).『英語力がぐんぐん身につく！驚異の音読指導法54』明治図書

家庭学習を促し、達成感を与える教材作り

科目名	リーディング	学年	3	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

男：女＝8：22（30人）の明るくにぎやかなクラスである。発問に対して積極的に発言する生徒が数名いる。進路は大学進学が多いが、そのうち大多数が指定校推薦によるものである。専門学校進学者、就職者も少数いる。

解決すべき課題

リーディングの授業であるのに、予習、授業内、授業後を通して、生徒が主体的なリーディング活動（自分の力で読んで理解しようとする活動）にかかわる場が少ない。

< 1学期の授業の流れ >

- ①ピクチャーカードによる内容の導入、新出単語の確認（ワークシート配布）
- ②リスニングをしながら教科書本文のキーワードの穴埋め
※ワークシートには、教科書の英文（キーワードが空所）と、それに対応する日本語訳（チャンクごとに書かれ、重要な箇所は空欄になっている）が交互に印刷されている。
- ③教科書を確認しながら本文の穴埋めの答えを確認
- ④完成させた教科書の英文を見ながらチャンク訳の完成（空所補充）
- ⑤音読をしながら全員で英文の意味の確認、まとめ問題
- ⑥板書されたキーセンテンス（重要な文法項目を含む）2, 3文について以下の活動
解説→音読（全員）→徐々に単語を消して暗記しながら音読（個人）

英文全体に目を通し、生徒が本文把握に努めるのは、④、⑤の活動にとどまる。英語Ⅰ、英語Ⅱのような授業構成になっており、特に長文読解のスキルを高める活動ができていない。

また、「自分にはわからない」と決めつけて、英文を読もうとせず、授業内で訳や答えが出るのを待っている生徒がクラスの約半数を占めているため、主体的にリーディング活動を行う場面があまりない。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

1学期の終わりに、「リーディングの授業に対する生徒の学習行動と自己評価」を調べるためのアンケート（5件法）を行った（回答数：22）。

*（）内は、5件法で 5：当てはまる、4：やや当てはまる、のいずれかを選択した生徒の割合

授業前

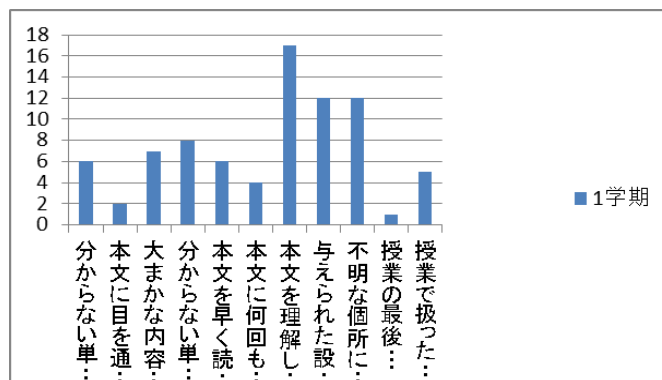
- ・わからない単語を調べた(27%)
- ・本文に目を通した(9%)
- ・大まかな内容をつかめた(32%)

授業中

- ・わからない単語を推測した(36%)
- ・本文を早く読むことを心掛けた(27%)
- ・本文に何回も目を通した(18%)
- ・本文を理解しようとした(77%)
- ・与えられた設問に対して、積極的に取り組んだ(55%)
- ・不明な箇所については、解説を聞くことで理解できた(55%)
- ・授業の最後に、リーディングしたぞ！という印象が残った(5%)

授業後

- ・授業で扱った文章を読んだ（復習のために再度読んだ）(23%)



授業前の活動については、「単語を調べた」(27%)、「本文に目を通した」(9%)、「大まかな内容をつかめた」(32%)という結果になった。このなかで一つでも「当てはまる」とした生徒、すなわち何かしらの「予習」をしている生徒の数は11人(50%)であった。もう少し多くの生徒に、予習をして授業に臨む習慣を身につけてほしいと思った。

また、授業中の活動について、「本文を理解しようとした」と答えた生徒が77%いるのに対し、「授業の最後に、リーディングしたぞ！という印象が残った」が5%であることから、この授業が、生徒にとって達成感のない授業になってしまっていることが推察された。

改善の目標

- ・クラスの7割の生徒が予習をする習慣を身につける。
- ・クラスの7割の生徒が授業後に達成感をもつことができる。

改善のための手だて

- ・取り組みやすい予習用ハンドアウトを導入すれば、生徒は予習をし、自信をもって授業に臨めるようになるだろう。
 - *予習用ハンドアウト：単語（訳語を選ぶ形式）、部分訳（既習の知識でできるもの）
- ・読解用ハンドアウトで教科書本文を複数回読む活動をさせれば、内容理解が深まることで、生徒の達成感も高まるだろう。
 - *読解用ハンドアウト：（表）部分訳、（裏）部分訳（空所増やす）、内容のQ&A、サマリー

< 2 学期の授業の流れ >

- ① 予習用ハンドアウトの答え合わせ
- ② 読解用ハンドアウト（表）… 部分訳（①をもとに各自で取り組む）、答え合わせ
- ③ 音読、ターゲットセンテンスの解説
- ④ 読解用ハンドアウト（裏）… 部分訳、答え合わせ
- ⑤ 読解用ハンドアウト（裏）… 内容の Q&A、サマリー、答え合わせ

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

3 学期の終わりに、前回と同じアンケートを行った（回答数 22）。

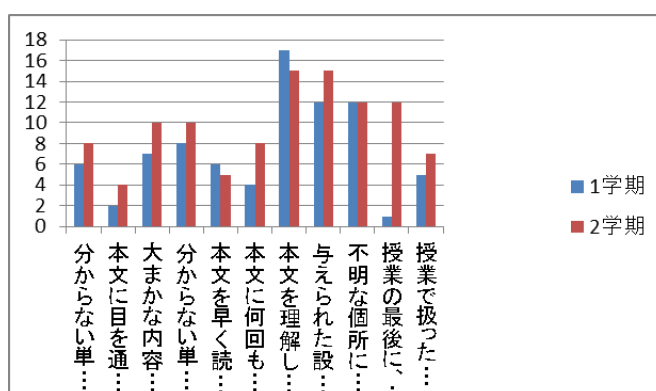
*（）内は、5 件法で 5：当てはまる、4：やや当てはまる、のいずれかを選択した生徒の割合

授業前

- ・わからない単語を調べた(36%)
- ・本文に目を通した(18%)
- ・大まかな内容をつかめた(45%)

授業中

- ・わからない単語を推測した(45%)
- ・本文を早く読むことを心掛けた(23%)
- ・本文に何回も目を通した(36%)
- ・本文を理解しようとした(68%)
- ・与えられた設問に対して、積極的に取り組んだ(68%)
- ・不明な箇所については、解説を聞くことで理解できた(55%)
- ・授業の最後に、リーディングしたぞ！という印象が残った(55%)



授業後

- ・授業で扱った文章を読んだ（復習のために再度読んだ）(32%)

授業前の予習ハンドアウトへの生徒の取組状況が全体的に改善した。今までは単語を調べた段階で、辞書等に日本語の意味がたくさん掲載されていると投げ出してしまいう生徒が多かったが、新出単語の意味を選択肢から選ぶという形にした結果、完璧にこなすとはいかないまでも、多くの生徒が自主的に取り組むようになった。また、既出の単語で構成された部分訳への取組もよく、内容把握をさせる際に役立っていた。「授業前」の項目のうち一つでも「(やや) 当てはまる」と回答した生徒、つまり何らかの「予習」をした生徒は、1 学期の 11 名 (50%) から 15 人 (68.2%) に増加し、目標の「7 割」まではわずかに届かなかったものの、ある程度の改善がみられた。

ハンドアウトに沿って取り組むと、生徒は 4 回本文に目を通すことになる。1 文ずつ教師が解説しながら読み進めていた 1 学期に比べ、生徒自身のリーディング活動を増やした 2、3 学期は、本文を繰り返し読み込むことで理解が深まり、「英文を読んだ」という印象が生徒のなかに強く残ったことが、アンケート結果に出ている。アンケートの自由記述のなかには、次のような感想がみられた。

- ・予習用ハンドアウトがあることで、前もって本文に目を通すようになった。
- ・授業前に自分で単語を調べておくので、本文に入ったときに大体理解できた。
- ・ハンドアウトが両面刷りで2回できるので、覚えやすかった。
- ・読む回数が増えて、リーディングの授業らしくなった。
- ・まとめがあったので全体の内容が理解しやすかった。

教師の変化

受け身の授業ではなく生徒自身が取り組む授業形態を目指していたので、生徒が自主的に取り組む姿をみられるようになったことが授業をする側として嬉しかった。また、リーディングの授業とは、何を教え、どのような活動をさせるべき授業なのかについて分析的に考えるようになった。ハンドアウトを作成する過程では、生徒がどのように英文を理解していくのだろうかという生徒の目線でリーディングを捉えることが、少しだけできたのではないかと思う。

今後の課題（次の改善点など）

授業内でのリーディング活動は大事である。しかし、授業中に生徒が読める英文の量は限られている。今後はいかにして授業外でリーディング活動に取り組みせ、また、それを真のリーディング力へとつなげていくかも、大きな課題となった。

こちらが生徒の活動をコントロールしようとする、必然的にハンドアウトの数が多くなってしまう。このような些細なことも、生徒の活動に取り組む意欲に影響するため、ハンドアウトをどこまで効果的にまとめられるかも今後の課題の一つである。

また、生徒の感想のなかに、「自分だけで考えるのもたまにやるのは身につくが、毎回になると嫌になって調べなくなった」というコメントもみられた。今後はリーディングの授業のなかに、生徒の学習意欲を高めるコミュニケーション活動や、いかに将来使える技能が身についたかという「お得感」を感じられるような活動を盛り込めたらよいと思う。

まとめ・感想

今回の「授業改善」では、授業形態において、科目のねらいを再度見直すことで反省点を発見することができ、また、少しあきらめかけていた生徒の取り組み方にじっくりと向き合うことができた。せっかく授業しているからには、少しでも生徒のプラスになるような授業を提供していきたい。そのためにも、授業提供者の自己満足で終わらせることなく、授業をする側と受ける側が同じ目標に向かって、ともに授業をつくり上げていくような形にもっていきたい。生徒をやる気にさせ、生徒を授業の活動にどんどん巻き込んでいき、頑張っている生徒を見て、こちらの授業づくりの意欲もさらに掻き立てられるような、ともに刺激し合い、高め合っていく関係性を築き上げていきたい。現段階で見つかった今後の課題にはこれからもしっかりと向き合って、よりよい授業を目指したいと思う。

生徒の意欲と自信を向上させる音読指導

科目名	英語 I	学年	1	形態	HR・習熟度・小集団
-----	------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

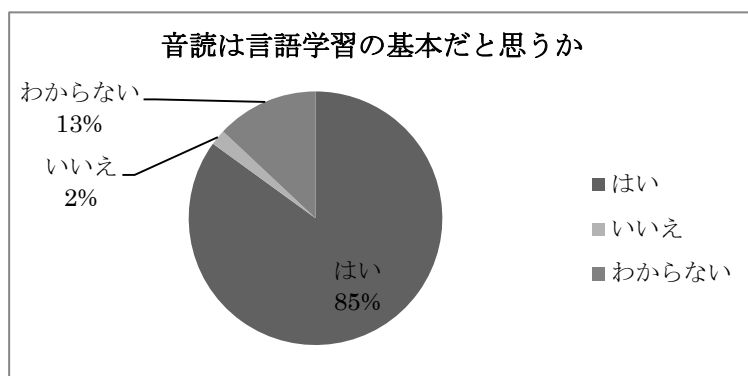
- ・ 1年生 3クラス 合計 105名 男女比 5.3 : 4.7
- ・ 中学時代英語が得意だったが、高校入学後つまずきを感じている生徒が多くみられる。
- ・ 約9割の生徒が大学への進学を希望している。

解決すべき課題

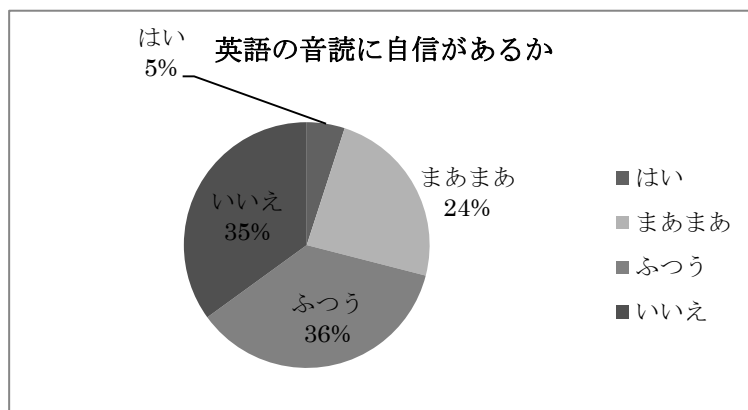
8割以上の生徒が、音読が言語学習の基礎であると理解しており、授業中の音読練習によく取り組んでいるが、1人で発表したり、英語で発言したりするとき声小さくなる生徒が多い。原因は英語の音読に自信がないことではないかと思われる。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

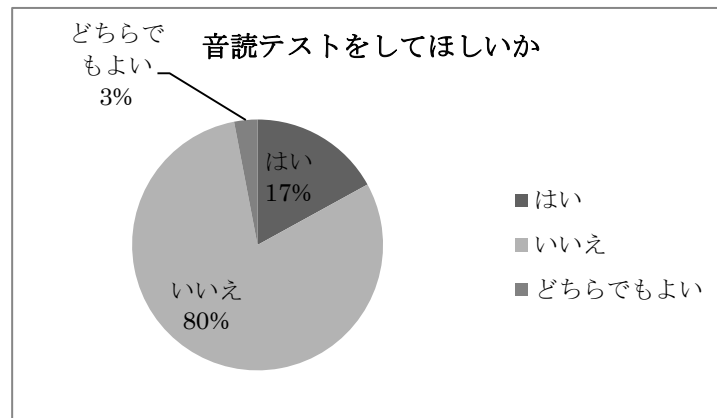
<7月のアンケート結果>



85%の生徒が「音読」は言語学習の基本だと理解している。



「まあまあ」も含めて、「自信がある」と答えた生徒は約30%であった。



「音読テスト」は「してほしくない」という生徒が 80%であった。

改善の目標

英語 I において、英文を音読することに「自信がある」「まあまあ自信がある」という生徒が全体の 5 割以上になる。

改善のための手だて

1. 音声指導を工夫すれば生徒が音読に取り組みやすくなるだろう
「音読のための発音レッスン」(各回約 10 分)を実施する
 - ① 発音ピラミッド
 - ② 音節
 - ③ 音の連結
 - ④ 強勢とリズム
 - ⑤ イントネーション
 - ⑥ 文における区切り (フレーズ)
2. 音読テストの代わりとして音読発表活動を導入すれば、生徒が個別に成果を示し、評価を受ける機会ができるだろう
 - ① 教科書の各レッスンの 1 セクション終了時の発表活動
* 各人が担当するのはだいたい 1 パラグラフ分(3~4 行)の英文
 - ② 毎回同じ発表者にならないようにする工夫: 「音読の殿堂」ポスターを作成

※音読指導の流れ

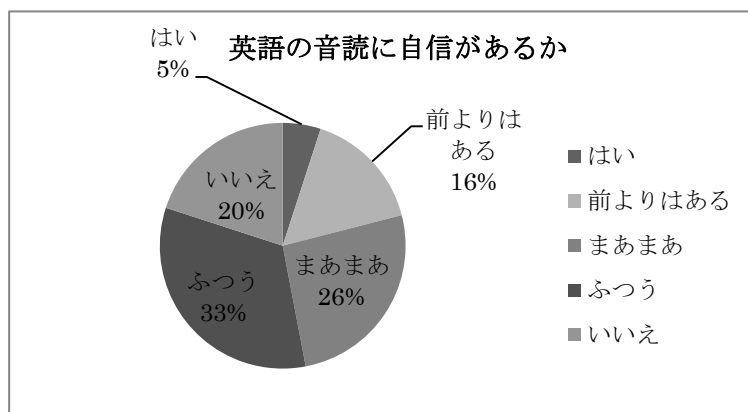
- ① 「音読のための発音レッスン」でポイントを指導する。
- ② 新出単語などの発音指導をする。
- ③ CD のモデルリーディングを聴かせる。
- ④ フレージング(意味のまとまりで切ることをしながら教師の後に続いてコーラスリーディングをさせる。
- ⑤ ペアワークでパラグラフごとに音読練習させる。
- ⑥ 挙手した生徒に発表させる。

⑦ 発表についてのコメントをし、「音読の殿堂」ポスターに生徒の出席番号を記入する。

*なるべくよい点をほめるように心がける。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

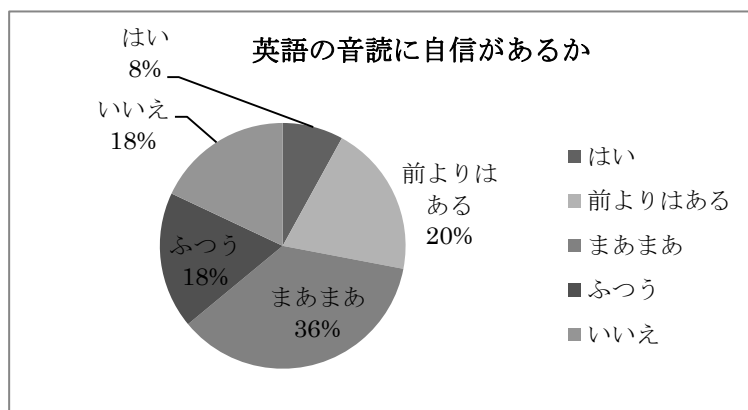
< 10月のアンケート結果 >



「英語の音読に自信がある」と答えた生徒：「まあまあ」も含めて 47%

5割まであと少し！2学期中間テスト以降も引き続き「改善のための手だて」に取り組んだ。

< 12月のアンケート結果 >



「英語の音読に自信がある」と答えた生徒：「まあまあ」も含めて 64%

目標達成！

< 生徒の変化：まとめ >

- ・「まあまあ」も含めて「英語の音読に自信がある」と答えた生徒は 5割を超えた。
- ・「音読のための発音レッスン」を受けたことにより、英語の音読の仕方を理論的に理解し始めた様子がうかがえる。
- ・「音読の殿堂」入りを目指して発表する生徒が増えた（11月には全員が1回目の発表を終了し、現在2回目の発表に取り組んでいる）。

教師の変化

- ・「音読のための発音レッスン」をすることにより、ポイントを段階的に踏まえ、集中して指導することができた。
- ・発表をした生徒によかった点を具体的に示して評価し、ほめて励ますように心がけた。多少の失敗には目をつぶり、大げさにほめるようになった。
- ・教師にほめられることや、よい評価を得ることによって生徒は自信をもつ、ということを実感した。

今後の課題（次の改善点など）

残り3割強の生徒も英語の音読に自信をもつことができるように、さらに「改善のための手だて」に取り組んでいく。

まとめ・感想

- ・改善目標を一つに絞り、ある一定期間集中して取り組むことが効果的であることを実感した。
- ・「音読のための発音レッスン」と題してポイントを絞った教材を使ったことが有効だった。
- ・3学期もさらに英文の音読指導を続け、2年生につなげる基礎力を養成したい。

授業改善にあたって参考にした資料等

Grant, L. (2006). *Well said INTRO*. Heinle & Heinle Pub

門田修平・野呂忠司・氏木道人(編著). (2010). 『英語リーディング指導ハンドブック』大修館書店

e-learning を活用した自律学習と協同学習

科目名	上級英語（自由選択科目）	学年	3	形態	HR・習熟度・ 小集団
-----	--------------	----	---	----	--------------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象生徒： 2クラス各 22名計 44名（男女比はともに 7:15）

授業時間： 1コマ=50分×2（×週 2日）

入試問題演習を中心とした自由選択授業のため、必修授業に比べると学習意欲のある生徒が多い。文系の大学・短大・外国語系専門学校への進学を希望する生徒や、看護・理系学部的一般入試を受験する生徒が混在している。

解決すべき課題

- ・冊子の問題集による問題演習授業は「答え合わせと解説」に終始し、生徒の授業態度が受け身になりがちである。
- ・生徒は進学希望であるが、基礎的な問題演習や音読練習を自主的に繰り返したうえで、実際の入試問題に近いさらに難しい問題にも挑戦してみようという積極性に欠けている。
- ・文法に加えて、語の認識、スペリング、発音が苦手で、学習がはかどらない生徒が多い。
- ・個人差に応じた入試対策を行う必要がある。

事前の現状把握

*当該授業を担当するにあたり、CALL 教室を希望し、授業全体の e-learning 化を試みることにした。

< 1 コマの授業の流れ >

1. 予習問題（4 択・空所補充）の解答入力と確認

*例題の解説を正確に理解できているかを確認する。

2. 実戦問題（4 択・誤文訂正・語順整序）の解答入力と確認

*ノートに書いてきた答えを添削し、さらに調べた事項も書き込む。

*合格する（10 題ごとの正答率が 80%以上-Wonderful!の表示になる）まで、ランダムに出題される問題を繰り返し解く。

3. 新規の発展問題の解答入力と確認（合格した生徒のみ）… 後から導入した活動

4. 予習問題・実戦問題の解説

*上記 1、2 の活動中に教師が集約した質問に対する説明を生徒にさせてみる。難しいところは教師が参考書を教材提示装置で投影しながら解説する。

5. ディクテーション、音読練習・テスト（録音）

*予習問題のうち、より基本的な 4 択問題の問題文について行う。

<生徒の取組状況：e-learning システムの個人データ履歴帳票を利用>

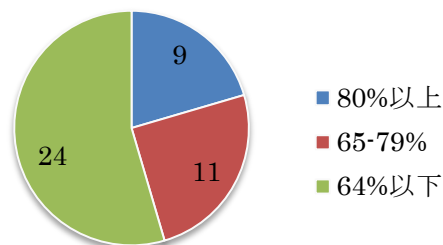
合格点（80%以上）達成比率 計算方法＝最高得点÷配点合計×100

[各自が解いた問題について、繰り返し解いたなかの最高得点を、配点合計で割った数値]

システムの解答評価：

100% Excellent, 80%以上 Wonderful, 65%以上 Good, 64%以下 Try again

5月正答率と人数 (44人中)



- ・実戦問題に合格（正答率 80%以上）した生徒は 44 名中 9 名（20.5%）にとどまった。この時点では発展問題へ取り組ませる積極的な働きかけはあまり行っていなかった。

改善の目標

文法にかかわる基本入試問題の正答率が 80%になるまで自主的に演習・音読を繰り返し、さらに発展問題に取り組む生徒がクラスの 5 割以上になる。

改善のための手だて

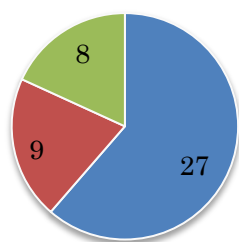
- ・基本から発展まですべての問題演習を e-learning 化すれば、生徒がより自主的、積極的に学習に取り組むだろう。
- ・予習や質問が評価されることを明確に示せば、予習をして授業に臨む生徒が増えるだろう。
- ・予習問題、実戦問題、発展問題のそれぞれに制限時間を設け、進捗状況別人数を示せば、生徒は張り合いをもち、より積極的に取り組むようになるだろう。

生徒の変化（途中経過・事後の検証結果など）

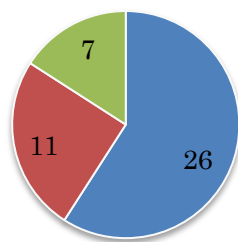
<生徒の取組状況：e-learning システムの個人データ履歴帳票を利用>

- 80%以上
- 65-79%
- 64%以下

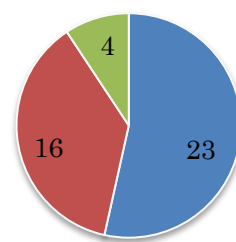
7月正答率
と人数(44人中)



10月正答率
と人数(44人中)



12月正答率
と人数(43人中)



- ・4月当初は問題集に答えを直接記入する生徒もいたが、5月中旬以降予習を重視し、時間制限を設けると、ランダムに出題される問題への対策として、実戦問題の英文をノートに写し、

日本語訳や参考書で調べた事項を事前に記入してくる生徒が増えた。また、7月の定期試験間際には、繰り返し問題を解くことの意義を理解したと思われる発言も増えた。

- ・7月の調査では合格者が27名と、5月の3倍にもなっており、このうち実際に合格後に発展問題に取り組んだ生徒は20名以上いた。
- ・10月の調査では、合格者の数は7月とほぼ変わらないものの、進路の決定にともない、積極的に発展問題に取り組む生徒は10名程度に半減してしまった。
- ・12月の調査では、合格者、正答率64%以下の生徒ともわずかに減少し、発展問題に取り組んだ生徒は10名程度にとどまった。

<アンケートのまとめ>

実施：12月定期テスト後 形式：自由記述（無記名） *（ ）は人数

質問項目：① 感想 ② PC活用のメリット・デメリット、黒板を使った方がよかったか
③ 来年の3年生選択者へのメッセージ

[肯定的コメント]

・予習と辞書持参が必須だが、授業中にノート取りで忙しくならない点が良い。	(11)
・自分のペースで（集中して）進められる（人の雑談で授業が止まることがない）。	(11)
・音声がかめられる。録音ができる。	(9)
・同じ問題を繰り返し解き直すことができる。	(7)
・不合格だと、全部シャッフルで解き直しになる点が大変だったが、ためになった。	(5)
・自分の記録が残り、後で見やすい。弱点の把握ができる。	(4)
・予習入力後、周囲の人との相談も勉強になる。	(3)
・自己採点する時間が省ける。	(3)
・たくさん問題を解くことができた。	(2)
・WEBの辞書が利用できる。	(2)
・生徒の進み具合などを先生が把握していて、平等に見てもらえる。	(2)
・選択問題は、短時間で答え合わせまで終わる。	(1)

[否定的コメント]

・（特に4月中は、）PC操作やタイピングなど英語以前のことが課題となった。	(7)
・ほんの少しの間違いでも不正解になる。	(6)
・すべて打ち込みなので、書かないと覚えられず学んだ気がしなかった。	(4)
・質問したかったが先生1人では不足だ。	(3)
・PCは教えてくれない。	(2)
・解答後、すぐに解説を見せてもらえないのがもどかしかった。	(1)

- ・年度当初は作成教材のミスや操作ミスなどから、e-learningの効果を危ぶむ声もあったが、アンケート結果から、学習でのPC活用の効果がある程度認めていることがわかった。
- ・「書かないと覚えられず学んだ気がしなかった」「先生1人では不足だ」「PCは教えてくれない」という否定的なコメントを書いた生徒は、予習や参考書等の活用に関して積極的に取り

組んでいなかった。自律学習を前提とする授業のシステムであることを生徒にもっと理解させるべきであった。

- ・この他、「目が疲れる」という感想が多数あった。

教師の変化

授業の進め方が大きく変わった。

- ・学力差に応じたさまざまなレベルでの個別対応が、授業中の最優先事項となった。
- ・全員への説明が必要となる時間では、生徒が解説テキストや WEB、参考書等で調べた後、質問してきた際の「ヒントの与え方」、「説明の仕方」を工夫するようになった。
- ・授業内容の e-learning 化により、原則的に一律に活動を進める必要がないので、「同じ質問の繰り返し」「既習問題に戻っての質問」「生徒同士の教え合いへの支援」などにゆとりをもって対応し、学習に寄り添うことができた。

今後の課題（次の改善点など）

- ・「各自の学び」に配慮し、「取り組み始めた問題は、8割正答できるまで繰り返し解く」ことを強調したので、基本入試問題の正答率 80%が達成できた生徒は7月末で6割を超え、その後も5割以上を保っていた。ところがその目標を達成した後、次の段階に進む生徒、つまり発展問題に取り組む「自律学習の態度が身につけている」生徒は7月には半数弱にとどまり、その後はさらに半減してしまった。より多くの生徒が向上心をもって進んで学習に臨み、難しい問題に取り組もうとする向上心をもてるような e-learning の活用方法を考える必要がある。
- ・6割以上の生徒が AO 入試、指定校推薦によって進路を決定しており、10月以降そのような生徒の発展問題への取組が後退気味となってしまった点も、次年度に改善すべき課題である。既存の e-learning 文法教材に加えて、難易度別文法問題や英検 2 級問題などを発展問題として提示しておけば、卒業前の中だるみを抑えられるのではないか。各種個人データ履歴を活用して生徒の実力を把握し、進学後の英語学習を視野に入れた指導内容を考えることが必要である。

まとめ・感想

「e-learning = 機械相手の個別学習 → 生徒と先生のかかわり合いの減少」という先入観は見事に覆された。多くの生徒が家での予習を高く評価されることに意欲的で、また下調べや質問内容が徐々に深まっていくことも毎回確認できた。生徒を個別に見ていくことは、通常の授業ではなかなか時間的に難しいが、e-learning はそれを可能にしてくれると思う。生徒同士が教え合うことで、生徒が共通言語としての文法項目の名称（「関係代名詞」など）を意識するようになった。参考書や辞書を利用した学習方法、調べ方を、この授業ではじめて身につけた生徒もいた。

以上のことから、「生徒は自律的に学ぶ環境に置かれてはじめて、学ぶためのさまざまなスキルを身につける必要を感じ、友人や教師とのかかわり合いをもとうとする」と言ってよいと思う。今後は、一般教室における授業でも、「一人で学び考え、知識を深める時間」をどのように確保するか、またどうすれば個人に対応した指導ができるか、ということについて考え、実践してみたい。

基本語彙定着のための基礎練習と応用練習

科目名	リーディング	学年	3	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

男女比はほぼ 1 : 1 で、非常に落ち着いているクラスである。卒業後は大学・専門学校進学から就職までさまざまであるが、勉強することに前向きな生徒が多く、課題や宿題などは指示どおりにやってくる。しかし、ほとんどの生徒は英語の基礎力が足りないため、文法項目だけでなく中学校既習の語彙まで授業中に調べさせたり、教えたりする必要がある。

解決すべき課題

生徒の語彙力の向上

英文を読むにあたってまず必要なのは語彙である。基本的な語彙が不足しているため、大意の把握も困難である。まして、各文の意味を詳細に理解するとすると、さらに多くの知らない語を処理しなければならず、精神的な負担も大きい。リーディングの科目としての目的を果たすためにも、基本的な語彙の習得が優先課題である。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

・語彙テストの結果

中学レベルの語彙の習得状況を調べるため、「大学英語教育学会基本語リスト (JACET8000) LEVEL1 (計 1000 語) より、リスト順で 20 個おきに抽出した語彙テスト (計 50 問) をみずから作成、実施した。それぞれの日本語の訳語を選択させる形式で、各 2 点で 100 点満点に設定した。その結果、8 割以上の点数を取った生徒は全体で 32%、平均点はおおよそ 52 点であった。

この結果から、選択形式の語彙テストであっても中学校既習の語彙の意味を正確に記憶している生徒が少ないことと、クラス内で点数の開きが大きいことがわかった。

・生徒の授業に対する意欲（授業評価の結果）

1 学期に学校で実施した授業評価では、95%の生徒が英語の授業に好意的であり、学ぶ意欲があると答えた。その一方、語彙テストの結果にみられるように、なかなか基礎力が定着しない現状があり、一刻も早く語彙指導を工夫する必要性を感じた。

改善の目標

「大学英語教育学会基本語リスト(JACET8000)」LEVEL1 に基づく語彙テストにおいて、8割以上の点数を全員の生徒が取得できるようになる。

改善のための手だて

- ・従来、始業時にのみ使用していたフラッシュカードを、授業終了時にも毎回5～10分程度用いて、繰り返し意味や発音を練習すれば、語彙の定着が進むだろう。
- ・学習した語彙が頻繁に使用されている「速読教材」を定期的に読ませれば、さらに語彙の定着が進むだろう。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・生徒の反応①（フラッシュカード）

普段から語彙指導の際にフラッシュカードを使用していたため、生徒はこの方法で語彙を増やしていくことには抵抗はなかった。回を重ねるごとに復習する語彙の数を増やしていったので、この活動にかかる時間は徐々に増えていったが一定の効果を上げることができた。

改善点を挙げるとすれば、目標のレベルの語彙が教科書の内容とずれていることがあるため、生徒にとって「基本的な語彙を増やすこと」と「教科書が読めるようになること」の関連性が見出しにくかった点である。また教師にとっても、10分程度の活動とはいえ教科書を使った授業内容との時間配分が難しいときがあり、実施できないこともあった。

- ・生徒の反応②（速読教材：教科書本文のリライト）

教科書とは別の文章を読むことを楽しんでいる生徒が多かった。学習した語彙が多く使用されているので辞書を引く必要はなく、内容に目を向けることもできていた。文法項目でわからない部分が多少はあっても、語彙が英語を読むにあたっていかに重要かということを確認してくれたようだった。

苦労したのは「JACET8000」LEVEL1 に基づいている「速読教材」がなかった点である。同じようなレベルの教材を用いても学習した語彙のすべてが使用されているものではなく、部分的に定着がうまくできない語もあった。そのため、教科書をLEVEL1の語彙で書き直したり、オリジナルの文章を作成したりしてその点を補うことにした。

- ・授業の変化

一番大きく変化したのは生徒の意欲である。1学期の授業評価の結果からもわかるように、この授業に対する生徒のやる気や期待は大きいものだとわかっていたが、教科書が少しずつ読みやすくなっていくにつれて英文を読むこと自体が楽しいと感じる生徒が増えたように思う。基本的な語彙に関する生徒からの質問も少なくなり、その他の説明や活動に時間をあてることができるようになった。

- ・語彙テストの結果

最終的に8割以上の点数を取ることができた生徒は60%であり、目標である「全員」からは程遠いものとなった。しかし、最初に実施したときは32%であったことを考えると、倍近

くの生徒の語彙数が大きく増えたことがわかる。

・改善点①

この活動を通じて生徒に導入できたのは約 500 語であり、LEVEL1 本来の語彙数の半分である。そのため、開始時期をもう少し早めて語彙を習得する期間を長くすることができたら、もう少し目標に近づくことができたはずである。前述したとおり、この活動に割かなければならない時間は少なくない。もし毎授業の負担を減らすことを考えるのならば、1 学年のときから計画的に導入する必要がある。

・改善点②

この活動は「評価対象外の活動」として生徒には伝えていたため、定期試験に向けての学習よりも動機づけがしづらいところがあった。生徒が本格的に学習を始めるためにはある程度の強制力が必要である。もしこの語彙テストの結果を成績に反映させることにしていたら、結果はよくなっていた可能性がある。

・改善点③

生徒にはこの活動をする目的を「英文を読めるようにするため」と伝えていたが、「英文」ということばがあまりにも漠然としたものであったため、イメージしづらい生徒が多かったように思う。生徒の動機を高めるためには、「ピーターラビットを読めるようにしよう」とか「ハリーポッターの一部を英語で読めるようになろう」など具体的な作品名を挙げたりして、生徒にとって目標を達成することで楽しみが増えるよう配慮すべきだった。

教師の変化

語彙指導の重要性の再認識

今回一番大きく感じたことは語彙指導の重要性である。英文を読むためには語彙が必要不可欠であることは前からわかっていたつもりだったが、この活動を始めたことでそれを再認識することができた。リーディングだけではなく、おそらくその他の科目においてもその重要性は変わらない。英語を話す、聞く、読む、書く、どのようなことをするにしても語彙がなければ最初の一步が踏み出せない。文法を学ぶときですら、例文に使用されている語がわからずに苦しんでいる生徒がいたことがわかった。

今後の課題（次の改善点など）

・語彙指導の継続

理想的には全員が「JACET8000」LEVEL1 のような基本語彙すべてを読み書きできることが望ましい。発展的な指導を展開するためにも、計画的に語彙の導入を図っていきたい。

・文法項目の定着

英文を読むにあたって、語彙の知識だけでもある程度の内容理解は可能である。しかし、筆者が文章に込めた思いなどを正確に読み解いていくには文法の知識も不可欠である。語彙への不安感を拭い去ったうえで、効果的な文法指導を構築していく必要がある。

まとめ・感想

・語彙習得について

前述のとおり、外国語学習における語彙習得の重要性を再認識できたことが、一番の収穫だった。語彙不足に苦しんでいる学習者はたくさんいるはずで、それが原因で4技能の学習を阻んでいるのであれば、少しずつその指導法を改良していく必要がある。今までは、語彙を調べさせるところだけ面倒を見て、「覚える」ことを生徒にすべて任せていた。暗記が得意でない生徒は学習が遅れてしまう一方である。生徒が楽しんで英語を勉強していけるよう、生徒の語彙力を増強するための活動をこれからも考えていきたい。

・データについて

今までは生徒のテスト結果のデータを取ったり、数値で目標を立てたりすることはなかったが、数字を通して生徒の成長を確かめることの大切さがわかった。客観的に自分の授業を見つめることもときには必要かもしれない。

授業改善にあたって参考にした資料等

相澤 一美・石川慎一郎・村田 年 (編者) (2005). 『「大学英語教育学会基本語リスト」に基づく JACET8000 英単語』 桐原書店

語彙の定着を促す提示の工夫と覚え方の指導

科目名	リーディング	学年	3	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

男女比は、ほぼ 1:1 で、明るく人なつこい生徒が多い。英語が好きな生徒もいるが、勉強そのものに興味がない生徒も多い。卒業後、大学・短大に進学する生徒もいるが、多くが専門学校への進学や就職をする生徒である。

解決すべき課題

授業への取組が積極的でなく、勉強しなくてもよいと思っている生徒がいる。特に、英語においては、何を勉強したらいいのか、どのように勉強したらよいかわからない生徒が多いため、英語の学力が定着せず、英語の授業に対する充実感や達成感を得られていない。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

教科書の 1 パートごとに 15 語の英単語や熟語を選び、そのなかから 10 語を出題するという英単語テストを行っている。1 学期の上位半分の生徒の平均点は 9.1 点であったが、下位半分の生徒の平均点は 4.7 点であった。

語彙サイズ測定テストを実施し、さらに現状を調べた。7 月の上位半分の生徒の平均は 1324 語、下位半分の生徒の平均は 949 語であった。このテストのもとになっている語彙リストの目標受容語彙サイズは中学レベルが 786 語、高校レベルが 2564 語、大学受験レベルが 4660 語であるので、中学レベルはクリアしているものの、高校レベル、大学受験レベルには程遠いといえる。

下位半分の生徒は、英単語のテストに対しても意欲的でなく、どうせやっても覚えられないと思っているようだった。また、英単語の覚え方もわからないようだった。

改善の目標

英単語テストにおける下位半分の生徒の点数を少しでも上げる。

改善のための手だて

- ① 英単語カードを使用して、単語の発音やスペリングの仕組み、単語の成り立ちなどを説明し、発音練習を増やすことで、単語の読み方やスペリングが定着しやすくなるだろう。
- ② なるべく多くのイラストを黒板に描くことで、英単語のイメージがしやすくなるだろう。
- ③ 英単語の読み方と意味を合わせた「ゴロ合わせ」や「ダジャレ」を紹介することで、楽しく意味を覚えることができるだろう。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ① 英単語カードを使用したことで・・・

- ・カタカナ発音から少しずつ離れて、元気よく発音するようになった。
- ・教師の発音のリピートをするだけでなく、ランダムに英単語を示し、みずから発音することが楽しくなったようだ。
- ・誤りやすいスペリングを事前に指摘することで、英単語テストで気をつけるようになった。
- ・長い英単語を覚えるときに、ある程度細かく区切って覚えることを学習した。

<アンケート結果>

役に立ったと思う 55.2% どちらかといえば役に立ったと思う 39.7%
どちらかといえば役に立たなかったと思う 5.3% 役に立たなかったと思う 0%

- ② イラストを多く描いたことで・・・

- ・その英単語のイメージがしやすくなったようだ。
- ・教師よりも上手なイラストを描いたり、オリジナルのイラストを描いたりするなど、授業への積極的な参加や語彙学習への工夫がみえた。
- ・英単語テスト前に自分のイラストを見せ合うなど、生徒のコミュニケーションが増えた。

<アンケート結果>

役に立ったと思う 42.1% どちらかといえば役に立ったと思う 50.9%
どちらかといえば役に立たなかったと思う 7.0% 役に立たなかったと思う 0%

- ③ 「ゴロ合わせ」や「ダジャレ」を紹介したことで・・・

- ・英単語テスト前に、友達同士で紹介した「ゴロ合わせ」や「ダジャレ」を言い合って勉強している光景がみえた。
- ・英単語テスト後、しばらくして、同じ単語が本文に出てきた時にも、意味をすぐに答えられた。英単語が以前より長く定着するようになった証拠であると思った。
- ・生徒が楽しく英単語を覚えるようになった。

<アンケート結果>

役に立ったと思う 41.4% どちらかといえば役に立ったと思う 51.7%
どちらかといえば役に立たなかったと思う 6.9% 役に立たなかったと思う生徒 0%

◎実践に対する生徒の評価「どのような点がよかったか？」(複数回答可、176人回答)

単語の発音が覚えやすくなった。 → 30人

単語のスペルが覚えやすくなった。 → 21人

単語の意味が覚えやすくなった。 → 32人

少し授業にやる気が出た。 → 21人

少し授業が楽しくなった。 → 24人

英単語テストの点数が上がった。 → 8人

英単語を覚える重要性が少しわかった。 → 8人

スペリングと発音の関係性が少しわかった。 → 11人

英単語をイメージしやすくなった。 → 21人

◎英単語テストの結果の推移

上位半分の平均 1学期 9.1点 → 2学期 8.1点 (-0.1)

下位半分の平均 1学期 4.7点 → 2学期 5.1点 (+0.4)

◎語彙サイズ測定テストの結果の推移

上位半分の平均 7月 1324語 → 12月 1659語 (+335)

下位半分の平均 7月 949語 → 12月 1180語 (+231)

教師の変化

- ・家庭学習、小テスト、授業の流れ、定期テスト、評価という一連の流れを見直し、無駄や無理がないかチェックし、指導手順をデザインし直すことができた。
- ・生徒がつまずきそうなところについて、事前準備をするようになった。
- ・英単語が覚えられない生徒がどこでつまずいてしまったのか、考えるようになった。

今後の課題 (次の改善点など)

今回の①②③の手だてを継続して行っていくと同時に、生徒の語彙数を増やすことをきっかけとして、いかに生徒の英語の学力を上げていくかを、学校全体の取組として考えていきたい。

まとめ・感想

以前より、どうしたら英単語をもっと覚えられるようになるのか、と生徒から何回も質問をされていた。しかし、自分が英単語を覚えるときには、何度もその語に出会い、辞書で調べ、何回も書く練習をしたり、自分でイメージを膨らませたり、英単語カードを利用したりと、自分なりの方法でやるしかないと思っていたので、「ひたすら練習してみなさい。」と生徒自身の努力を求めている。

しかし、誰もが単語を覚えるときに、何らかの工夫をしているはずである。本来は自分で自分なりの方法を考えるのがよいと思うが、英単語を覚えられない生徒が、誰もが工夫をしているということや、誰かが考案した方法を学んだことで、飛躍的に多くの英単語を覚え、授業がわかるようになり、そして、英語の教科書が読めるようになり、さらには、自分で自分なりの工夫ができるようになれば、英語学習が楽しくなり、もっと積極的に学習するようになると思う。

上記の数量的なデータの伸びは短期間のものであり、本校で実施している朝学習や他の英語の科目からの影響も考えられるので、一概に、この実践だけの結果とは考えにくい。生徒のコメントや授業中の様子から判断すると、効果はあったものと考えている。

今回のプロジェクトを通して、この素朴な疑問に対して、研修で紹介されたさまざまな言語活動や検証方法を用いながら、しっかりと向き合い、チャレンジできたことは、とても貴重な経験だったと思う。

一緒に研修に参加した先生方、国際言語文化アカデミアの先生方には心から感謝するとともに、今後も、さまざまな助言をお願いしたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

シダエリ. (2008). 『ハッピー！イラスト塾』 廣済堂出版

藤井秀男. (2010). 『ダジャ単』 エコール・セザム

村上隆一. (2004). 『中学英単語 おもしろ記憶術』 受験研究社

相澤一美・望月正道 (編著). (2011). 『英語語彙指導の実践アイデア集』 大修館書店

語彙力増強を目指した教材活用と言語活動

科目名	英語Ⅱ	学年	2	形態	HR・習熟度・小集団
-----	-----	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

- ・35人編成（男子23名 女子12名）
- ・習熟度別の上級クラスで、雰囲気はとても明るく、授業に対する関心意欲も高い。
- ・ほぼ100%の生徒が進学希望である。

解決すべき課題

アンケートや平素の試験の結果から、生徒が英文を書くことを大変苦手としていることがよくわかる。英作文のみならず、長文読解力向上のためにも、まず語彙力を増強したい。

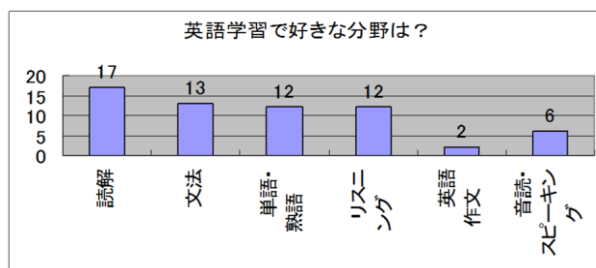
事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

1. 第1回語彙サイズテストの結果（8月26日実施）

	平均値	最大値	最小値	標準偏差
第1回	3038.3	4233.3	2100.0	464.82

2. アンケートによる意識調査

（質問）あなたの英語での得意（好きな）分野は何ですか。（5月実施：複数回答可）



(考察) 予想できた結果だが、「話す」「書く」といった能動的な活動が苦手である。特に英作文には圧倒的に苦手意識をもっている。一方、テーマである語彙力増強に関しては、それほど躊躇していないようだ。

改善の目標

該当クラスの全体の平均語彙サイズが2割向上する。

改善のための手だて

- ・時事英語を教材に用い、語彙力を高める。
- ・単語熟語テキスト（単語集）を教科書学習に有効利用する。
- ・単語小テストを英英形式（語の定義を提示する方式）で出題して、飽きないようにする。
- ・クリスクロスゲームなども行い、ゲーム感覚で語彙力を高める。

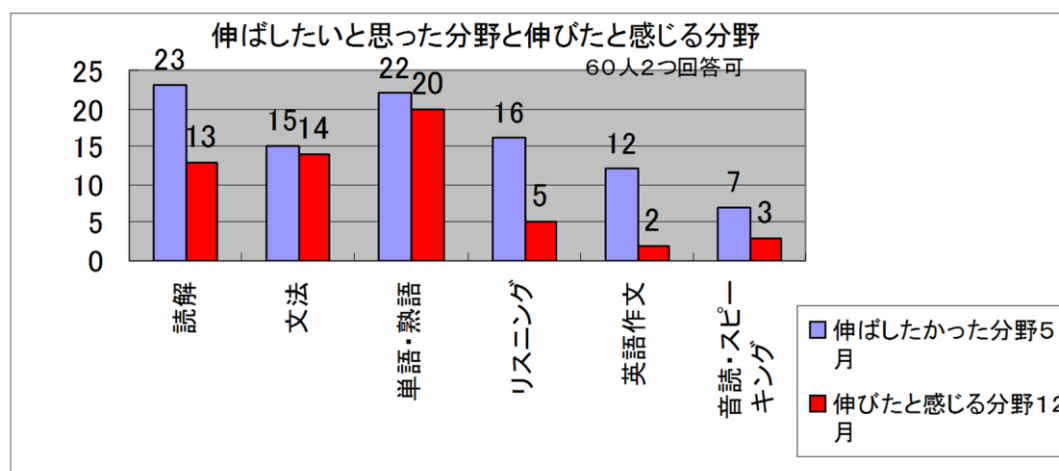
生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

1. 第1回語彙サイズテスト・第2回語彙サイズテスト（12月2日実施）の比較

	平均値	最大値	最小値	標準偏差
第1回	3038.3	4233.3	2100.0	464.82
第2回	3131.7	4466.7	2166.7	467.60

(考察) 統計学的に有意な伸びであることは認められたものの、第2回の平均値は目標値3645.6語（ 3038.3×1.2 ）には届かなかった。9月よりクラス編成が変わり、半数の生徒が異なったクラスで学習している。第2回は定期試験明けに前回の生徒を集めて実施した。試験後の身体的、精神的疲労も結果に反映されているのかも知れないが、厳しい結果を厳粛に受け止めている。

2. 生徒の意識の変化 (同じ実践を行った2クラス60名のアンケートの結果から)
 (質問) 伸ばしたいと思っていた分野が実際伸びたと感じられますか



(考察) 5月のアンケートで生徒が伸ばしたいと思っていたものを左に、12月時点で伸びたと感じているものを右にそれぞれ示した。語彙に関しては22人の生徒が伸ばしたいと感じていた。そのうち20人の生徒が「語彙力が向上した」と答えている。語彙サイズテストの結果では顕著な向上は認められなかったが、1種類のテストでは計測しきれないことも否めない。今後も生徒の語彙に対する意識の高さをうまく活かして、語彙力増強に取り組みたい。ただ、残念ながら、英作文に対する生徒の苦手意識は依然根強いものがあり、是非とも改善の糸口をつかみたい。

教師の変化

目標をもって授業に臨むことによって、授業に核のようなものができたように感じている。語彙の拡大を公言して、繰り返し、繰り返しことばに出すことによって、担当者の授業イメージが確立してきたように思われる。生徒の期待に応じられるよう、語彙力増強のための自主教材作りや授業展開の工夫に取り組む気持ちが高まってきた。

今後の課題 (次の改善点など)

単に語彙力増強を目的にするのではなく、それを発展させて、生徒の進路実現に必要な英語力を養えるような授業を行いたい。さらに受験英語のみにとらわれず、英語の面白さや楽しさを生徒に感じてもらえる授業を展開したい。そのために何が必要か、日々、試行錯誤を繰り返したい。

まとめ・感想

数年ぶりに1年間を通しての研修に参加させていただき、自分の授業について客観的に振り返ることができた。自己嫌悪と希望との繰り返しの毎日だが、素晴らしいインストラクターの方々や研修仲間に出会い、勇気をいただくことができた。継続は力を旗印に楽しみながら、日々研鑽に努めたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

佐野正之. (2000). 『アクション・リサーチのすすめ』 大修館書店
相澤一美・望月正道. (2010). 『英語語彙指導の実践アイデア集』 大修館書店
Thomas, H. (1983). *Better English made easy*. New York : Warner Books
Lewis, N. (1991). *Word power made easy*. New York : Pocket Books

読解問題に対応する力を伸ばすための言語活動

科目名	リーディング	学年	3	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

- ・クラス人数 38 名（男子 16 名 女子 22 名）
- ・にぎやかな生徒も多いが、学年のなかでは真面目で落ち着いた生徒が多いクラスである。
- ・指定校を中心に、AO、推薦で約 8 割が進学する（3 学年全体がそのような状況である）。

解決すべき課題

授業には比較的よく取り組み、音読や暗唱練習も全体がよく行っている。その一方で、定期試験での教科書本文の内容理解にかかわる問題の正答率がいま一つ伸びない。生徒が、授業でしっかり取り組んだことを、結果として残していけるようにすることを課題とした。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

< 3 学年スタート時 >

- ・8 割の生徒は英語 I や英語 II で、音読をベースとした授業を行ってきた。
- ・その他の生徒は、音読活動をほとんど行ったことがなく、その重要性も認識していない。
- ・入学当初より単語集を使用し、3 年間で 3000 語を学習させる計画を立てていた。3 学年スタート時では、2400 語の学習が終了している。
- ・事前調査の結果、英語が苦手な生徒の割合は概ね 9 割にのぼる。特に、語彙、文法、長文読解のなかで生徒が最も苦手とする分野は、長文読解であった。
- ・9 割以上の生徒が、家庭学習の方法がわかっていない。

< 1 学期 >

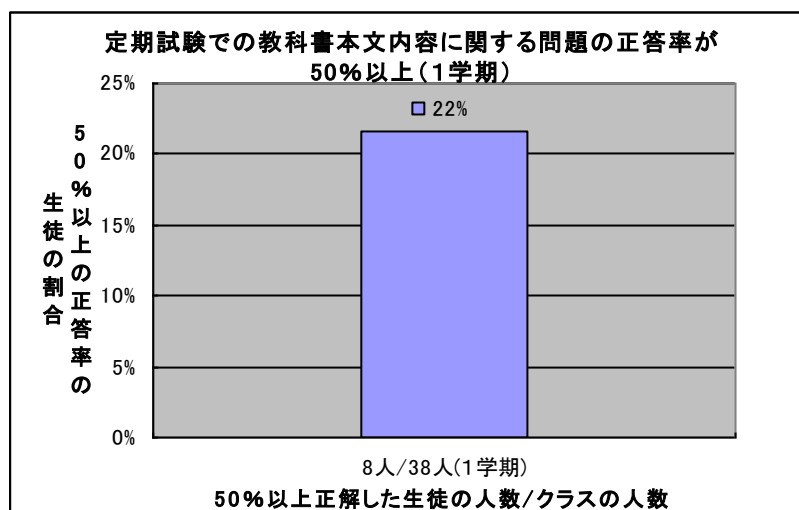
全員が新出語彙や表現を宿題でしっかりと調べてくるが、他の活動をさせると、調べてきたことが使えていない生徒が多かった。音読練習をはじめとする、授業での練習が十分にできていなかったことが原因であると考えた。

（授業観察から）

- ・英語による Q&A に対応できている生徒はクラスの 2、3 割程度であった。新出語彙や表現の練習が不十分なため、内容理解の場面で意味が取れず、適切な答え方がわからない、ということが推測された。
- ・音読練習については、ペアワークなどさまざまな形態でさせてきていたせいか、意欲的に取り組んでいた。
- ・暗唱用のワークシートを用いながら、生徒は家庭での音読練習をよく行っていた。しかし、

発表の様子をみると、内容を確認しながら読む、聞き手に伝えることを意識して読む、というよりは、ただ丸暗記してきたことを、棒読みのように再生するにとどまっている生徒が多かった。

実際に、定期試験の教科書内容理解にかかわる問題の得点を見てみると、正答率 50%以上の生徒は 8 人 (22%) にとどまった。



改善の目標

定期試験での教科書本文の内容にかかわる問題において、正答率が 50 パーセント以上の生徒が、クラスの半数以上になる。

改善のための手だて

音声を重視した言語活動を工夫すれば、生徒が教科書の内容を理解する手助けになるだろう。

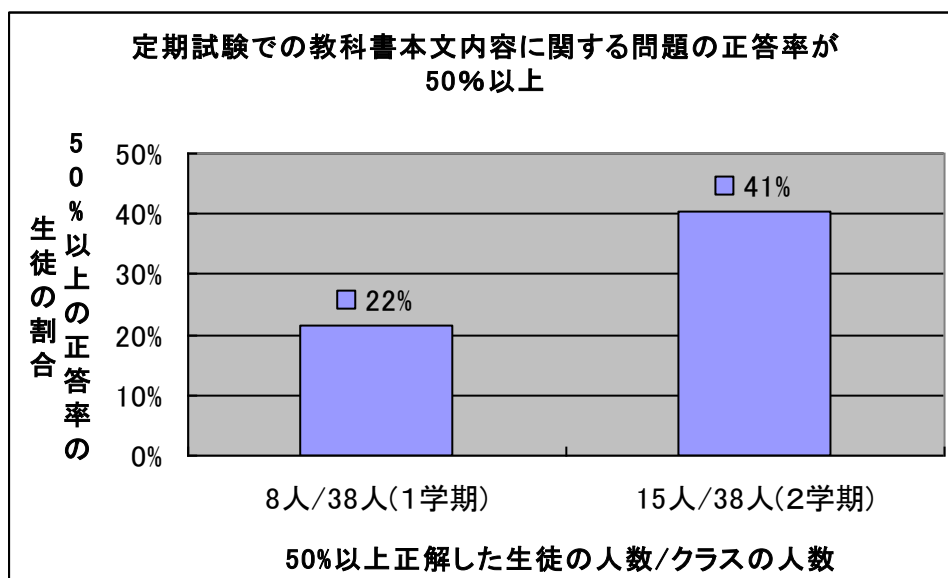
- ・フラッシュカードを用い、繰り返し読ませることで語彙や表現の定着を図る。
- ・表現の理解ができた後、英語による Q&A によって本文内容の概要をつかむ。
- ・本文内容がある程度理解できたところで、音読暗唱へと向けた音読練習をしていく。
- ・暗唱がよりしやすくなるように、いくつかの段階に分けた音読練習ワークシートを作成し、家庭学習用に配布する。

生徒の変化 (途中経過、事後の検証結果など)

< 2 学期 >

- ・フラッシュカードを用いて新出語彙や表現の定着を徹底して行った。日本語から英語へ、英語から日本語へと文字情報を切り替えながら繰り返し音声による練習をすることで、記憶に残り、後に続く内容理解の場面で使えるようになってきていると感じた。

- ・英語での Q&A タスクのスピードが上がった。また、正解する生徒がかなり増えた。フラッシュカードによる反復練習の結果、語彙や表現の音と意味が結びつきやすくなり、教師の英語による質問を理解しやすくなったのかもしれない。
- ・音読練習については1学期同様、積極的に取り組んでいた。特に、家庭での音読練習の成果を出すために、暗唱発表のための練習を任意ではあるが次回までの宿題とし、それを全員の前で発表させることで、他の生徒により刺激を与えることができたようである。
- ・レベルを4段階に分けた暗唱用ワークシートを作成したことで、英語が苦手な生徒も意味を理解しながら本文を音読、暗唱できるようになった。



定期試験の教科書内容理解にかかわる問題で、正答率50%以上の生徒は、半数まではいなかったものの、1学期の8人（22%）から15人（41%）にほぼ倍増した。

教師の変化

- ・さまざまな活動から成るワークシートを作成する必要があるため、教材研究の時間が増えた。内容によって指導の仕方を変える工夫をするようになった。
- ・音読指導も多くなるため、教師が英語を発する状況が増え、生徒にもインプットする量が多くなった。
- ・教師が毎時間英語を発することにより、教師も生徒も英語での指示や授業の流れに慣れてきたため、英語による授業がやりやすくなった。

今後の課題（次の改善点など）

- ・年間を通して行くと、どんなに音読をよく行うクラスの生徒でも音読に飽きてしまう傾向にあるので、やる気を維持させ続けるにはどうしたらよいか。
- ・より英語らしく読ませるためにはどうしたらよいか。

まとめ・感想

「音読暗唱」を柱とした実践を、前年度から経験してきた生徒とはじめて取り組む生徒が混在するなかで行ってきたが、次のような発見があった。

- ・音読活動や英問英答の活動に対する、生徒の抵抗感が大幅に減少した。1学期後半からフラッシュカードでの音読練習を増やした結果、生徒の音読の声量も大きくなり、英語にたくさん触れることで教師の発する英語の意味も理解しやすくなったようだ。
- ・日本語訳を介さない内容理解指導を継続して行った結果、「新出語彙や表現を前もって練習しておけば、一度の読みでも要旨をつかめるということを感じられるようになった」という声が、生徒から徐々に出るようになってきた。
- ・スモールステップ方式のワークシートを使用することで、生徒の取組状況が改善することがわかった。個人差への対応を考え、特に英語の苦手な生徒が取り組みやすいようなワークシートや、意欲的に取り組む生徒を伸ばすために難しめのレベルに設定したワークシートを準備することにより、全体がよく取り組める状況を少しずつつくれるようになった。
- ・発表は、時間がかかっても全員の前で行うことが大切だとわかった。それによって、生徒同士が刺激を受け、取組状況が変わってくる。英語が苦手な生徒が立派な発表をした時ほど、他の生徒にとっては大きな刺激となる。

授業をよりよくしようとするれば、それなりに時間や労力がかかることは事実である。一つのワークシートの作成にかかる時間が、昨年度よりも大幅に増えたが、何かしらの達成感を味わえた生徒が多くいたことに安心した。今年度の実践をより発展させ、幅広い英語指導法を学び、文法指導やリスニング指導、ライティング指導等にも活かしていきたいと思う。

授業改善にあたって参考にした資料等

- 樋口忠彦・緑川日出子・高橋一幸(編著). (2007). 『すぐれた英語授業実践—よりよい授業づくりのために』 大修館書店
- 金谷憲(編集代表). (2009). 『英語授業ハンドブック 中学校編』 大修館書店
- 米山朝二・杉山敏・多田茂. (2006). 『改訂版 英語科教育実習ハンドブック』 大修館書店
- 伊東治己(編著). (1999). 『コミュニケーションのための4技能の指導』 教育出版
- 今井康人. (2009). 『英語力が飛躍するレッスン』 青灯社
- 伊藤雄二(著). (1995). 『英語教師の四十八手 教科書の活用』 研究社
- 葉袋洋子(著). (1999). 『英語教師の四十八手 リーディングの指導』 研究社
- 菅正隆・北原延晃・久保野雅史・田尻悟郎・中嶋洋一・蒔田守 (DVD) 『どの子ども英語が好きになりたい 6-way Street 何を教えて何を学ぶのか』 バンブルビー

生徒の意欲と自信を向上させるリーディング指導

科目名	リーディング	学年	3	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

男女ほぼ半々の 39 名のクラスである。全体的に明るく元気で、前期は積極的に音読活動に取り組んでいる生徒が多かった。しかし 1 クラスのなかでも学力や学習意欲は十人十色で、学習に興味を示さない生徒、5 文型の理解が曖昧な生徒、中堅私立大学を進路先に考えて授業に期待を抱いている生徒が混在している。

進路先は、公務員、専門学校、短大、4 年制大と多様である。またクラスの約半数が指定校推薦、公募推薦、AO 推薦によって進路先を決定している。そのため後期になると、学習態度が思わしくない生徒が増え、教室全体が落ち着かない雰囲気であった。一般受験を控え熱心に授業に参加している生徒たちがいるなかでどのように効果的に指導したらいいのか、頭を抱える日々が続いた。また、今までどおり教科書を使って同じように授業を展開していくことに限界を感じていた。

解決すべき課題

- ・集中して授業に参加させ、教室全体の雰囲気を活発にすること。
- ・生徒のニーズに合わせて授業展開をして、生徒の学習意欲を向上させること。

事前の現状把握

○事前アンケート：生徒のニーズ

「リーディングの授業でやってほしいこと」（自由記述、回答者 35）

- ・センター試験、大学入試の過去問題（長文）の解答解説（6 名）
- ・わかりやすく楽しい歌（6 名）
- ・単語、熟語の復習、小テスト（6 名）
- ・読解のコツの指導（2 名）
- ・文法の復習（2 名）
- ・洋画（2 名）
- ・特になし、現状のままでよい（9 名）
- ・その他（2 名）

<コメント>

- ・受験は終わったけど、英語は将来使いそうだから簡単な長文とかを読みたい。
- ・入学したら TOEIC を受験しなくてはいけないので、勉強したいけど何をしたらいいのかわからない。(コメントは原文のまま)

アンケートの結果や科目の目的などから総合的に判断し、センター試験の長文問題が3年リーディングの授業で取り上げるのにふさわしいと判断した。他の多数の担当者と進度を合わせなければならないため、隔週の1コマ分をセンター試験問題演習(グラフ・図のある長文問題)にあてることにした。グラフ・図の問題に限定したのは、昨年の3年生から質問が多数あった部分であり、1コマ50分の授業のなかで無理なく解答解説ができ、またTOEICのような資格試験にも類似した問題が出題されるため、すでに進路が決まっている生徒も意欲をもって取り組んでくれると考えたからである。

改善の目標

- ・集中して授業に参加する生徒が、クラスの8割以上になる。

改善のための手だて

- ・センター試験で出題されるグラフや図のある長文問題を2週間に1回の割合で時間制限を設けて実践的に解けば、さまざまな生徒たちのニーズを満たし、学習意欲が高まるだろう。
- ・「英文を読む前に設問に目を通す」などの読解ストラテジーを指導すれば、より速く必要な情報を読み取ることができるようになり、自信につながるだろう。

生徒の変化

○事後アンケート：生徒の自己評価

「センター試験問題演習中心の授業になって感じた変化」(自由記述、回答者24名)

- ・センター試験第4問が少し解けるようになった気がする。
- ・自分は全力でやったけど、未完成だった。周りは少しずつ伸びて差をつけられた気がした。
- ・左から右に(後ろから戻ることなく)読めるようになった気がする。
- ・入試を意識できてよかったです。
- ・正答率が上がり、成長したと思いました。
- ・解説時の(教師の)発音やアクセントがよく頭に残った。(2名)
- ・集中して取り組む人が増えた。
- ・みんな真面目だった。(2名)

- ・静かだった。
- ・決められた時間内で速く読む必要があったので緊張した。
- ・センターの時間配分の目安になった。
- ・自分で考えてできたからよかったです。
- ・センター対策に取り組むことで卒業テストの応用問題で高得点がとれたのでよかった。
- ・今までは全文を読んでから問題に答えるというやり方で時間を無駄にしていたけど、授業で長文問題をやっていくうちに、解くコツがつかめるようになった。
- ・早く読むようになった。(5名)
- ・長文が苦手なことがわかった。(大学) 入学前にやろうと思う。(2名)
- ・英語に抵抗感がなくなった。

(記述は原文のまま)

回答の多くが前向きなものである。特に、「集中して取り組む人が増えた」「みんな真面目だった」のコメントはクラス全体の学習態度の変化に言及している。これらの結果から「集中して授業に参加する生徒が8割」になったのかどうかは判断できないものの、多くの生徒が目的意識をもって問題に取り組み、自分の英語学習に対する発見や達成感をもつことができたのではないかと考える。また、長文読解のためのストラテジーを指導したことで、「ほかにどのようなコツがあるのか」と意欲的に質問する生徒が増えた。また教材に TOEIC などの資格試験とも類似したセンター試験のグラフや図のある長文問題を使用したことで、進路が決まった生徒も意欲的に授業に参加する様子が見ええた。授業改善を境に、クラスの雰囲気も活発になったのは間違いない。

教師の変化

生徒が熱心に課題に取り組む、解説を聞こうと目を輝かせているので、教材の選定や効果的な解説の準備など、教材研究にこれまで以上に時間をかけた。

また、自分自身も英語力向上の必要性を意識するようになり、受験した資格試験のスコアが上がった。

今後の課題 (次の改善点など)

- ・授業アンケートで生徒のニーズがよく理解できたので、これからも定期的に取り入れたい。
- ・生徒のリーディング力がどの程度向上したのか数値的にわかる方法を学びたい。

まとめ・感想

授業改善の一環としてセンター試験の長文問題を取り入れるようになって、発見が多かった。

まず、生徒の長文問題に取り組む集中力がまるで普段と違うことにとっても驚いている。生徒のニーズに合わせて普段と違う活動をしたり、制限時間を計って緊張感をもたせて取り組ませたり、点数をつけて仲間と競わせたりすると、生徒の心の奥の向上心を刺激することができると改めて感じた。

生徒が授業に関して要望したり不満を訴えてきたりすることはないのでわからなかったが、アンケートを実施してみて生徒の求めているものがよくわかり授業に反映することができた。アンケートはこれから勤務校が変わっても実施していこうと思う。同僚に「リーディングの授業でセンター試験の問題演習をしたい！」と提案したら賛同を得られ、やはり「生徒の取り組む様子がかなりよい！」と好評で、連帯感が生まれたのがとてもよかった。

授業改善にあたって参考にした資料等

太田洋・金谷憲・小菅敦子・日臺滋之.(2003).『英語力はどのように伸びてゆくか』

大修館書店

津田塾大学言語文化研究所読解研究グループ(編著).(2002).『英文読解のプロセスと指導』

大修館書店

速読力を高める基礎練習とリーディングタスク

科目名	リーディング	学年	3	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

3年の3クラスのリーディングの授業において実施した。1クラス40人の規模であり、どのクラスも若干男子の割合が多い。

1クラスは文系選択者単独のクラスである。授業での発言等も多く活発で、活動も積極的に行う生徒が多いが、集中力に欠ける面がある。他の2クラスは文理選択者が入り混じったクラスである。文系より理系の生徒の数が多く、英語に苦手意識をもった生徒も多いが、文系単独クラスに比べると比較的落ち着いた雰囲気である。発言等はあまり多くみられないものの、真面目にコツコツと授業に取り組むことができる生徒が多い。

解決すべき課題

センター試験やさまざまな大学の入試問題において、昨今、速読の必要な読解問題が多くみられる。多量の英文を短時間で読み、問題を解くことが求められている。したがって、語彙や文法事項にとらわれすぎずに、英文のトピックや要点を素早く見つける力の育成が必要であると感じた。また普段の授業においても、概要をつかむ問題を苦手とする生徒が多いことが気になっていた。これらの力を培うべく、まずは1分間で読める語数を増やすこと、そして正しい理解をもって読める語数、「読解率」を向上させることを課題とした。それらが結果的に概要をつかむ力になると考えた。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

大学入試センター試験の近年の傾向においても、読む英文の量が増え、そのなかから的確に概要をつかむ力が必要とされている。

生徒自身の意識としても、「英文を読む際、最も気をつけていることは何か」という問いに「概要をつかむこと」と「語彙、文法を理解すること」という回答が半数程度に分かれた。概要をつかんで意味をとることが大事であると理解しながらも、やはり実際に英文を目にすると語彙や文法事項にとらわれて長い文章を読む際に時間がかかりすぎる、結局内容がつかめないなどの問題が生じていることがわかった。そこで、より多くの語彙を習得し、文法事項を学習していくことは必須のことであるが、同時に現在もっている知識で英文を読み進め、概要を捉える力の育成も行っていくべきであると感じた。

また、1年次から使用している速読教材についても、生徒の速読力を測るだけでなく、生徒の速読力を伸ばすための活用方法を探っている。

改善の目標

- ① 昨年度の全体の平均値が WPM（1分当たりに通り返める語数）90～100 語程度であったので、今年度は WPM 100 以上を維持すること。
- ② 「読解率」（一通り返めた WPM×設問正答率）の平均が 80 語程度となること。

改善のための手だて

1 年次より速読教材を使って、教科書以外の英文読解に取り組ませてきたが、生徒も教師もその取組が一様化している面があった。改めて英文を読むうえでの問題を生徒に認識させ、速読の目的を考えて取り組めるような活動を取り入れ、速読力の向上を図った。

具体的には、教科書の各レッスンで次のような速読的な読み方の訓練を行った。

- ① フレーズリーディングを徹底させ、戻り読みをさせないような工夫をした。教科書の英文に意味の切れ目を入れさせ、それを意識させた音読活動を取り入れた。
- ② 話の概要を理解しているかを問う問題を与えた。センター試験や大学の入試を意識して、多くは選択肢のある問題とした。
- ③ パラグラフの並べかえやパラグラフの要約を問う演習問題を設定し、常にパラグラフごとに内容を理解する意識を育てることを重視した。

（検証方法）

速読教材*『10 分間テスト形式による英文速読演習 Fast Reading in 10 Minutes Stage 3』（文英堂）を用いて、週に 1 度 WPM、「読解率」を計る。

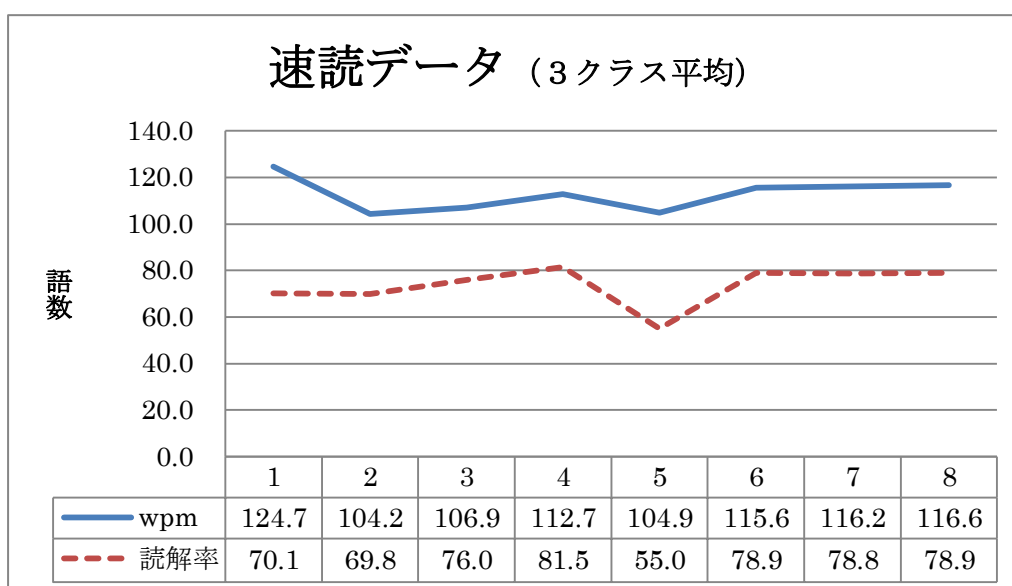
*シリーズ教材の Stage3 で、語数や内容、質問の難易度が徐々に上がっている。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

まず、英文読解に取り組む姿勢が少しずつ変わってきた。ただ漠然と英文を流し読むのではなく、話題や話の展開に注意して読もうとしていることが、その後のタスクを通じてみえた。数値的な変化が急激に表れたわけではないが、週に 1 度の速読教材を用いた授業そのものも以前より活気が出て、読み方の技術の習得のために真剣に取り組もうとする生徒が増えたように感じた。今回、一番力を入れて取り組ませたフレーズリーディングも徐々に定着していき、指示されなくてもスラッシュで区切りながら英文を読む生徒の姿も、後半は多くみられるようになった。

また、全体の雰囲気として、毎時間の目的を明確化したことで、授業により熱心に参加する生徒が増えた。音読活動においても以前より声を出し、意味のまとまりを意識した読みができるようになってきた。設問を選択問題にしたことにより、生徒から「取り組みやすくなった」という声も聞かれた。やはり、細部への問いには十分に対応できない生徒もいたが、「話題は何か」「述べられていないことはどれか」「タイトルをつけるなら何が適切か」などといった英文の全体像を探る問いの正答率は以前に比べて格段に伸びてきた。

以下、3 学年 3 クラスで行った速読のデータである。



数値の結果としては、生徒の受験形態や進路選択などによって個人差が大きく、平均値においてあまり変化はみられなかったが、2回目以降、WPM、読解率はそれぞれ、100前後、80前後で安定してきた。5回目の測定では、生徒がトピックの背景知識を十分にもち合わせていなかったうえに、英文の抽象度が高く、「イメージがつかみにくかった」という声が多く聞かれ、その結果、読解率が著しく下がっている。このように英文の話題についての背景知識の不足で大きくWPMや読解率が左右されてしまうということがデータに明確に表れ、背景知識の理解の重要性も改めて実感した。

教師の変化

以前より英文のまとまりを意識すること、要点をつかむことをねらって授業を行っていたが、具体的な取組として、フレーズリーディングを実施したり、概要や要点を問うタスクを行ったりしたことで、授業そのものを再考する機会となった。特にリーディングスキルを育てられるようなタスクを含む英文の読み方の指導は、自分の読み方を振り返って考えたり、新たに文献を読んだりすることで得るものも多く、授業はもとより自身の学習にも参考になった。また、内容にかかわるキーワードの導入などを、英語によるオーラルイントロダクションのなかで行ったことにより、教室内での英語使用を増やすこともできた。今回の授業改善の取組を通じて、これまで授業で行ってきた一つひとつの活動を見直し、生徒の理解度やクラスの状態を見て適切に活動を精査していく必要性を感じた。教材研究や授業準備に時間はかかったが、生徒が新しくなったワークシートや問題形式に興味をもち、熱心に取り組んでくれることが励みとなった。また導入のsmall talkや英語で要約を作成することなど自分の英語力を高める機会にもなり、ライティング力やスピーキング力を高める日常的な努力の重要性を実感した。

今後の課題（次の改善点など）

まず、授業で扱うリーディングスキルを精査し、生徒にそれらを意識させながら問題演習に取り組みせるようにするとよかった。フレーズリーディングで意味の区切れを意識させることにとどまり、文と文のつながりや、語の推測や話の展開の推測、またパラグラフ内部の構成、トピックセンテンスの認識等にかかわる指導については、十分にできなかった。特にパラグラフリーディングは、英文を書くうえでも非常に重要であるため、今後、効果的な指導に努めたい。

また、速読を行うときに語彙の扱いがとても難しかった。わからない語彙があるとどうしても止まってしまう、読むスピードが落ちてしまう。事前の語彙の扱い方についてもっと工夫が必要であると感じた。文法事項の学習においても同様である。また、トピックによって速度や理解が影響してしまうため、あらゆる話題について背景知識を身につけさせることが必要であると感じた。背景知識を蓄積するという意味でも、多読の活動をこれからの授業に取り入れたいと思った。

教科書の内容理解では、意識的に選択問題を多く取り入れたが、すぐに答えにたどり着くことができない生徒への対応が不十分であった。段階的に簡単な英問英答によってヒントを提示する、答えを含む箇所に下線を引かせるなどの方策が必要であった。40人クラスの一斉授業で、力のバラつきが顕著に目立ってしまう結果となった。ワークシートを作る際には生徒から出てくる答えを幅広く予測し、段階的に答えを探らせるというタスクの工夫も今後の課題としたい。

まとめ・感想

授業の見直しから出てきた課題を今回のテーマとし、改善のための試みを行ってきたが、授業で行う一つひとつの活動の意味を改めて考えさせられる機会となった。CDを用いたリスニングや生徒の音読活動など、当然授業に取り入れるものだと考えて行っていたが、どの段階でどのような目的をもってやらせるのかによって、その成果は全く異なったものになるということに気づかされた。

今回の速読力の育成というテーマにおいても、生徒のニーズと合致していなければ、取り組ませたい活動にも十分に理解を示されなかつただろうと考える。普段から生徒とかかわり、意思疎通をすることの重要性にも気づかされた。生徒と教師が相互に課題を認識し合い、それを解決していくための術として授業を活用できれば、どれほど有意義な時間となるだろう。そのような授業を目指し、今回学んだことを十分に活かしながら、これからも自己研鑽、授業改善に努めていきたいと思う。

授業改善にあたって参考にした資料等

大賀理市(編). (2009). 『10分間テスト形式による英文速読演習 Fast Reading in 10 Minutes Stage3』 文英堂

和田稔(監修)・JEC 英語教育研究会. (2008). 『リーディングパワー 発展編 三訂版』 数研出版

金谷憲(編)・高山芳樹・臼倉美里・大田悦子. (2011). 『高校英語授業を変える 訳読オンリーから抜け出す3つのモデル』 アルク

土屋澄男(編). (2011). 『新編英語科教育法入門』 研究社

速読力向上を目指した語彙指導と読解指導

科目名	リーディング	学年	3	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

3年生2クラス（計60名、男女比はほぼ1:1）で、いずれも穏やかな雰囲気のクラスである。ほとんどの生徒が進学を希望している。

解決すべき課題

4月から実施している速読テスト『改訂版 Reading Gym 英語速読テスト標準編』（数研出版）におけるWPM（Words Per Minute: 1分間に読めた語数）の値に上昇がみられない。

*WPMの算出方法：「読んだ総語数 ÷ 一通り読めた時間（分）×設問の正答率」

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・週1回測定しているWPMの9回の平均値は79.8で、平均WPM100を超えた生徒は15人（26.8%）であった（最小値0は問題の正答率が0によるもの）。回により数値は上下しており、回を追うにしたがって伸びているとはいえない。

表1. WPMの変化（第1回～第9回）

	平均	最大値	最小値	標準偏差
第1回	80.6	182.2	13.4	36.89
第2回	75.1	280.0	0	49.26
第3回	66.9	227.5	0	45.93
第4回	96.3	246.3	18.7	50.83
第5回	82.8	301.5	0	63.64
第6回	71.5	183.4	0	40.70
第7回	86.9	272.8	28.8	50.57
第8回	91.4	231.3	0	54.70
第9回	67.1	159.7	0	39.00

- ・4月に「日本人英語学習者のための語彙サイズテスト」（望月、1998）で、推定語彙サイズを測定した。3000語レベルまで受験させた結果、推定語彙サイズの平均値は1945.5であった。

改善の目標

WPM100以上の生徒が6~7割以上になる。

改善のための手だて

1. 語彙指導をすれば、英文の読解の助けになり、WPMが向上するだろう。

- ・語彙の導入時に、プレゼンテーションスライドで画像などの視覚情報を提示する。
 - ・「JACET8000」の2000語レベルの基本語彙を繰り返し学習させる。
 - ・週に一度『DataBase3000【基本】英単語・熟語』（桐原書店）の単語テストを実施し、テスト前後にコーラスリーディングを行う。
 - ・Phrase hunt と Sentence hunt で、意味のまとまり、コロケーションを認識させる。
2. Skimming（大意把握読み）の指導をすれば、読解の助けになり、WPMが向上するだろう。
 - ・教科書本文の内容をチャートにして記入させ、論旨の流れなどを推測させる。
 3. 各活動の目的や効果を説明すれば、動機づけが高まり、WPMも向上するだろう。
 - ・語彙の重要性、Skimmingの目的、音読活動の効果などを、各活動前に口頭で説明する。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・引き続きWPMを測定した（表2、図1）。最小値0は正答率0によるものである。全6回分の平均値は79.4となり、WPM平均値が100を超えた生徒は16人（28.6%）であった。やはり数値は上下し、回を追うにしたがって伸びているとはいえない。

表2. WPMの変化（第10回～15回）

	平均	最大値	最小値	標準偏差
第10回	79.5	295.6	0	54.68
第11回	101.2	242.4	0	51.92
第12回	80.5	280.9	0	55.40
第13回	77.8	242.8	0	56.01
第14回	61.4	206.3	5.1	45.34
第15回	75.8	240.0	0	76.83

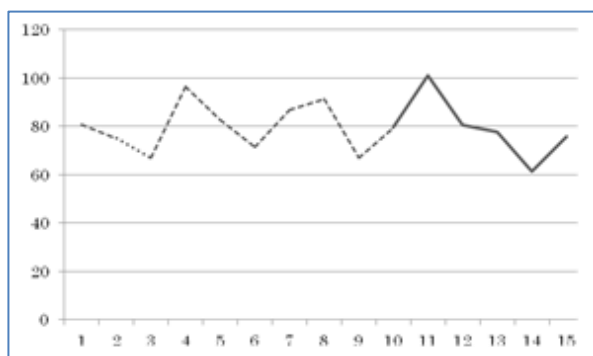


図1. WPM平均値の変化（第1回～第15回）

- ・12月に対象2クラス（回答者数：53）にアンケートを実施し、WPM値の変化への自己認識、授業内の各活動が動機づけへ及ぼした影響を調査した（表3、表4）。

表3. 早く読み取る能力が伸びたと思うか

	とても思う	思う	あまり思わない	思わない
人数	13	25	10	5
%	24.5	47.2	18.9	9.4

表4. 興味をもって取り組めた活動（3個まで選択可）

項目	人数	%
単語テスト	8	15.1
速読テスト	11	20.8
プレゼンテーションスライドによる新出語句の指導	15	28.3
プレゼンテーションスライドによるオーラルイントロダクション	□8	15.1
Phrase hunt	9	□17.0
Sentence hunt	7	13.2
Skimming	5	9.4
プレゼンテーションスライドによる音読活動	4	7.5
文法解説	6	11.3
授業内における教師の英語使用	4	7.5
無回答	3	5.7

生徒が授業の効果について肯定的な印象をもっている（表3）反面、表4からは **Phrase hunt** や **Sentence hunt**、**Skimming** の活動が動機づけにあまり機能していなかったことがうかがえる。しかし、ここでは「3個まで選択可」という設定のもとで、およそ半数の生徒が一つの項目しか選択しなかったため、各項目の割合が小さくなってしまった（最大でも28.3%）と思われる。「3個選ぶ」という設定であれば、違うデータを引き出すことができたであろう。

- ・12月に再度「日本人英語学習者のための語彙サイズテスト」（望月、1998）を用いて、推定語彙サイズを測定し、4月の結果と比較した（表5）。

表5. 推定語彙サイズテストの変化

	平均	最大値	最小値	標準偏差
第1回（4月）	1945.5	2654	1192	311.00
第2回（12月）	2318.9	2885	1731	306.22

この平均の伸びが統計学的に有意なものかどうかを調べた。まずこれらのデータが正規分布しているといえるかを **Kolmogorov-Smirnov** 検定によって確認したところ、第2回のデータの正規性が認められなかった（第1回 $p=0.182 > 0.05$ ；第2回 $p=0.031 < 0.05$ ）。そこで **Wilcoxon** の符号つき順位検定で差の検定を行ったところ、この伸びは統計学的に有意であることが認められた ($p=0.00 < 0.05$)。また下位生徒の伸びが大きかったことがわかった。

この語彙サイズの向上については、画像を活用した単語提示や学習が効果的であったと考えられる。1月に授業の感想を自由記述で書かせたところ、この方法が語彙の定着に役立ったという感想が多かった。また付随的な要因として、単語テストや学校外の学習が考えられる。

教師の変化

- ・質的、量的の両方の側面から生徒の学習状況を分析することの重要性を再認識した。
- ・リーディングをさせる以前に、その基礎となる語彙や文法などの言語知識の指導の充実が必要であることを再認識した。

今後の課題（次の改善点など）

- ・外発的動機づけ（extrinsic motivation）と内発的動機づけ（intrinsic motivation）

進路決定の過程で生徒の学習への外発的動機づけが低下するなか、学習そのもの楽しさや意義を見いだす内発的動機づけに対する働きかけが弱かった。「なぜ英文を早く読む必要があるのか」「どのようにすれば早く読めるのか」という問題意識を教師と生徒が共有できていなかった。目的を教師と生徒が共有できれば、学習への動機づけも高まるであろう。教師自身の外国語学習者としての成功体験や苦労した話などを生徒に伝えながら、一緒に学んでいこうという雰囲気づくりから始めることが大切であると思った。

- ・ボトムアップ処理（bottom-up processing）へのアプローチ

授業のなかで、語彙や統語などのボトムアップ処理の指導が十分ではなかった。門田（2007）によれば、優れた読み手は、文字認知、語彙処理などの下位プロセスが自動化（automatization）されており、統語処理、意味処理、スキーマ処理、談話処理という上位プロセスに注意を向けつつ、両者をパラレルに実行している。今回の取組では下位プロセスの自動化や上位プロセスの処理速度向上のための活動が不十分であり、その結果 WPM の伸びにつながらなかったと考えられる。今後、まず下位プロセスの自動化を促すために、音読やシャドーイングなどを効果的に取り入れていく必要がある。

まとめ・感想

目的意識をもって活動や授業をデザインすること、そしてその教師の思いが生徒と共有できていることの難しさ、大切さを実感した。また、生徒が抱える問題を質的、数量的に分析し、それに応じた指導法を工夫するという視点を学ぶことができた。

今回の取組は、これまでの自己の授業実践を振り返る貴重な機会となった。また、さまざまな情報交換、同様の課題を抱える教師との仲間づくりができたことは大きな収穫である。この研修で得たことを、勤務校や地域における英語教育の発展に活かしていきたい。

最後に、この一年間の研修中、親身になって相談にのっていただいた国際言語文化アカデミアの先生方、受講にあたりご理解ご協力をいただいた勤務校の先生方に深く感謝を申し上げたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

相澤一美・望月正道. (2010). 『英語語彙指導の実践アイデア集』大修館書店

大田悦子. (2011). 「縮約版を利用した2度読み」『アルク主催「第5回 Sherpa 発表会」高校英語授業改善 一訳読 Only からの Takeoff— 講義テキスト』アルク

門田修平. (2007). 『シャドーイングと音読の科学』コスモピア

清川英夫. (1990). 『英語教育研究入門』大修館書店

静哲人. (1997). 「しらける授業をしていた私」『現代英語教育 97年 12月号』研究社

白畑知彦・富田祐一・村野井仁・若林茂則. (2009). 『改訂版英語教育用語辞典』大修館書店

磯田貴道・廣森友人. (2004). 『英語教師のための教育データ分析入門』大修館書店

村野井仁. (2007). 『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館書店

VanPatten, B. & Benati, A. G. (2010). *Key terms in second language acquisition*. London: Continuum.

長文読解のためのリーディングストラテジーの指導

科目名	イクステンシブ・リーディング	学年	3	形態	HR・習熟度・ 小集団
-----	----------------	----	---	----	--------------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

- ・ 3年生対象の選択科目：317名の生徒のうち97名が選択（うち男子41名、女子56名）
- ・ 97名の受講者を3クラス展開で実施：①文系のみ27名（男子12、女子15）②文系・理系合同の33名（男子15、女子18）③文系・理系合同の37名（男子14、女子23）
- ・ 受験教科のなかで英語、とりわけ長文読解が苦手を選択した生徒が多い。60%強が私立大の3教科型の受験を考えており、英語に触れる機会を増やし、英語が読めるようになりたいという理由で選択している。

解決すべき課題

- ・ 2年次に全員を対象に行った大学入試センター試験模擬受験（1月）や、実力テスト（2月、全国模試）などで、長文読解のスピードが遅く、得点率も振るわなかった生徒が多い。
- ・ 長文を読むのに必要とされる語彙の覚え方が有機的でなく、効率が悪い。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・ 学校で採用している単語集『英単語ターゲット1900』（旺文社）で、1年次から小テストを実施してきたが、長文の読解の際に語彙力不足を感じていると訴える生徒が多い。
- ・ 派生語や同義語、反意語に関する知識が乏しく、語彙力増強のための取組に工夫が必要である。
- ・ 英文全体のテーマやキーコンセプトに気づくことができずに、一つひとつの単語の意味に振り回されて読んでしまう生徒が多い。
- ・ 設問の形式に応じた読み方が理解できておらず、あらゆる英文を日本語に置き換えながら読むとする習慣から脱却できない。

改善の目標

- ・本校生徒の 95%以上が受験する大学入試センター試験の第 6 問の長文読解問題において、8 割以上の生徒が 15 分の解答時間で 8 割以上得点できるようにする。

改善のための手だて

- ・問題の本文を読む前に、どのようなレベルでの読み方が必要とされているかを知るために、また本文のキーワードやキーコンセプトを類推するために、設問文からヒントを得ることができるようになれば、生徒の速読力は向上するだろう。
- ・True-or-False (以下 T-or-F) の設問を含む長文問題で WPM を 130 程度に設定し、最初のタスクを T-or-F の解答に限定して読ませれば、生徒はスピードの遅い訳読から脱却できるようになるだろう。
- ・重要語彙の派生語や同義語、反意語などをグループ化して学習させれば、T-or-F の正答率も向上し、語彙の学習に対する生徒の学習意欲を高めることができるだろう。

生徒の変化 (途中経過、事後の検証結果など)

(T-or-F の先取り、速読指導の効果)

- ・制限時間のなかで T-or-F の設問を先に読ませることで、速読の意識を高めることができた。
- ・T-or-F の設問に含まれている重要な語彙の派生語や同義語、反意語などをまとめて提示することで、未知語であっても問題本文の文脈から意味の類推を試みることができるようになった。
- ・T-or-F の設問を読み終えた段階で、本文のキーワードやキーコンセプトを想像することができる生徒が増え、設問のなかに多くのヒントが含まれていることに気づくようになった。
- ・T-or-F の答え合わせにゲーム性をもたせたことで、生徒の多くを指名することができ、教室の活性化につながった。
- ・本文を読み進めながら同時に T-or-F を解く生徒が増えていき、スキニングのコツをつかむとともに、解答速度も向上し、全問に正答する生徒の数も増えた。
- ・T-or-F の解答チェックをするなかで、しだいに筆者が述べたい主題を予測できるようになり、この段階でオーラルイントロダクションとしてサマリーのリプロダクションを提示しても生徒は十分ついてくることができるようになった。

(オーラル活動の効果)

- ・表に空所を含む英文、裏に完全な英文を載せたハンドアウトで、ペアワークによるサマリーのリプロダクションに取り組ませたが、ほとんどの生徒が積極的に参加し、概要を理解していた。
- ・リピーティング、シャドーイング、シンクロリーディングなどの活動でサマリーを音読するこ

とで、主題の理解が進み、精読に移行できるようになった。

- ・長文読解のための授業でありながら、ペアワークを含むオーラルの活動は 65 分という長丁場のなかでよい気分転換になり、多様な活動のなかで読解に臨むことができるようになった。
- ・シャドーイングやペアワークの後に発表の場を設けたことで、ともに学習するクラスの仲間の意欲を共有することができ、学習環境としての一体感が高まった。
- ・これらの活動後に T-or-F 以外の設問にきちんと答えるべく、本文の精読に移行すると、英文の概要が把握できているために、「読める」という実感を得る生徒が増えた。

(効果の検証)

- ・3ヶ月にわたるこの実践をはさんで、センター試験の第6問の15分での速読と、その正解率8割の生徒の状況を検証したところ、9月が46.0%だったのに対して、12月に87.9%となり、当初の目標を達成することができた。
- ・事後のアンケートで、次の3点に関して、どれくらい効果的だったかを調査したところ以下の結果となった(5点が「非常に効果的だった」1点が「全く効果なし」)。
 - ① T-or-F を先に読んでから本文に入る戦略的読解法 ⇒ 4.35 ポイント
 - ② 派生語、同義語、反意語をグループにしてまとめて提示する語彙指導 ⇒ 4.68 ポイント
 - ③ WPM 130 (難易度、空所の数などで変化) で制限時間を設けた読解指導 ⇒ 4.56 ポイント

教師の変化

- ・重要語彙を派生語や同義語、反意語とともに提示して語彙力を伸ばす指導には、生徒に購入させた単語集での掲載ページを先に調べておいたうえで、どのレベルまで示すかをきちんと計画する必要がある。購入させた副教材を活かすも殺すも、生徒の学習意欲を向上させるも低下させるも、教師の丁寧な教材研究に根ざした準備が鍵を握るということを再認識した。
- ・オーラルの活動を取り入れ、活気ある協働作業でのリーディングは大成功であったが、その準備として、私が本文の要約を英語で作成する必要があり、私自身の英語力のますますのスキルアップの必要性を痛感することになった。

今後の課題(次の改善点など)

- ・長文問題には、必ずしも T-or-F の設問があるわけではなく、当然、設問からヒントを得るという手法が難しい場合もある。また、「大学入試のための英語長文の攻略法」的なアプローチであることは否めず、より汎用性のある読解力の向上に役立つストラテジーを研究する必要がある。

まとめ・感想

- ・受験を控えた3年生対象の選択講座であり、生徒に対して「失敗に終わるかもしれない」というリスクの高い手法での研究はむずかしい状況があったわけであるが、結果として、生徒たちはセンターレベルの長文を、まったく苦手意識をもたずに読めるようになった。私の指導を信じてついてきてくれた彼らに感謝したい。
- ・アンケートで、具体的に生徒の評価を数値化してみると、語彙の導入は、まず「読み物」があって、実際の用いられ方をいきいきと提示できる場面があってこそ、生徒の側の学習意欲と結びつくのだと改めて感じた。「単語集で範囲を区切ったうえで毎週小テストを行って定着」という手法は、教師の側の都合としては理解できるが、生徒たちにとっては無機的な頭脳労働であるという感も否めないだろう。
- ・時間を決めて制限時間内で読む指導を徹底したので、速読できず、読み終わらなかった生徒にとっては非常にストレスの溜まる授業だったかもしれない。しかし、事後のアンケートで、**WPM 130**を基本にして制限時間を設けた指導を「全く効果なし」として1点をつけた生徒は皆無だった。高校時代、単語一つひとつの意味を確認して訳しながら読む、という指導ばかりを受けてきた私にとって、速読のための効果的な指導方法として、自分の指導方針に一定の自信を深めることができたデータである。

自作評価スケールを活用した自由英作文の指導

科目名	英語Ⅱ	学年	2	形態	HR・習熟度・小集団
-----	-----	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

- ・生徒数 80 名（男子 37 名、女子 43 名）
- ・明るく活発な生徒が多く、課外活動はもちろんのこと、学業に対しても積極的である。教科書の音読やコミュニケーション活動が得意で、周囲と協力して前向きに取り組むという雰囲気がある。家庭学習の習慣も確立されており、予習率は 90%を超える。
- ・高校卒業後は、ほぼ全員の生徒が 4 年制大学への進学を希望している。

解決すべき課題

生徒は向上心があり前向きに学習に取り組んでいるため、小テストや定期テストの成績はこれらの要求を概ね満たしているが、その反面、長期的な展望が乏しく、英語力を実際に運用する機会がほとんどないため、学習内容を応用して表現する能力が養われていない。英語を用いて自分の考えを表現する能力は、各自の進路希望を実現するためにも必要なものであり、改善すべき課題である。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・夏季休業中の課題として、「文章を読んだ感想や内容について調べたことを 50 語程度の英語で表現する」というものを課したところ、ほぼ 3 分の 2 の生徒が挑戦した。しかしその約半数は、ウェブサイトを書いたか、翻訳ソフトを使用していた。また、自分の力で書いた生徒の英文の多くは、単文のみの構成であり、スペリングや文法上の誤りが目立った。
- ・定期テストでは、「並べかえ問題が苦手」との申し出が多かった。予習、音読活動、内容理解、復習テストを通じて教科書の本文に触れているにもかかわらず、自己表現に応用できる文構造が身につけていないため、テストの際、使われている単語や場面が変わると、同じ構文であることに気づかず得点できなくなってしまう。

改善の目標

日常的な話題について、大きな誤りがなく一貫した内容の 1 パラグラフの英文（5～7 文）で書ける生徒が、クラスの 70%以上になる。

改善のための手だて

- ・教科書の英文を読む際に、パラグラフの構造に注意した読み方をさせれば、その意識がパラグラフライティングにも活かされるだろう。
- ・英問英答の活動で、単語でなく、文の形で答えさせれば、文構造への意識が高まるだろう。
- ・リスニング活動や音読活動に取り組みせれば、英作文に再利用できるチャンク（意味のまとまり）への意識が高まるだろう。
- ・語彙学習後にその語彙を使った1文を作らせて発表させれば、語彙の定着が高まるだろう。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

< 第1回パラグラフライティング（10月実施） >

トピック：My favorite ...

条件：5～7文で書く。学習した単語や表現を最低二つ使用し、必ず関係詞を含む。

基本的なスペリングミス・文法間違いをしない。辞書・参考書の使用は可とする。

結果：80人中77人が課題に取り組み、提出した。

	評 価	第 1 回
合格者数	評価スケール*における各観点ですべて B 以上	45 人 (58.4%)
不合格者数	1 個でも C がある	32 人 (41.6%)

事後指導：英作文は評価スケール*における三つの観点に基づき、3色のペンを用いて添削した。返却後、三つの観点を提示・説明した。優秀作品を紹介し、よくある間違いの例を示して復習した。12月に再度行うことを予告した。

(*「評価スケール」は後述)

- ・内容理解のためのリスニング活動の導入で、それに対応するための予習をする生徒が増えた。
- ・音読活動に生徒がますます積極的に取り組むことで、授業が活性化した。
- ・パラグラフの **Topic Sentence**、**Transition Signals** に意識が向くようになった。
- ・最初はなかなか書けなかった1文英作文にも徐々に慣れ、自分たちの生活に密着した話題や、ジョークを表現する生徒も出てきた。

< 第2回パラグラフライティング（12月実施） >

トピック：My School Excursion / My Dream / My Unforgettable Experience から一つ選択

条件：5～7文で書く。学習した単語や表現を最低二つ使用する。

第1回パラグラフライティングでの問題点をクリアする。辞書・参考書の使用は可とする。

結果：80人中78人が課題に取り組み、提出した。

	評 価	第 1 回
合格者数	評価スケールにおける各観点ですべて B 以上	57 人 (73.1%)
不合格者数	1 個でも C がある	21 人 (26.9%)

分析：前回と比べ、複文の割合が多くなり接続詞の間違いが減った。論理の展開がスムーズになった。合格者が 57 人 (73.1%) になり、目標を達成することができた。
評価スケールを独自に作成し、生徒に示したことは効果的であった。

*ライティングのための自作の評価スケール

COLOR	POINTS	ELEMENTS TO BE ASSESSED	A (3points)	B (2points)	C (1point)
			the number of errors		
RED	content	meets the requirements shows his/her main idea produces clear, smoothly flowing stories	0	1,2	3~
BLUE	grammar vocabulary	writes with correct grammar and vocabulary (spelling)	0,1	2~4	5~
GREEN	collocations expressions	uses transition signals effectively uses the right collocations and expressions	0	1~3	4~

* 5 文未満のものは RED(content)において 2 点減点

教師の変化

- ・生徒に課す課題のゴールを明確に示すようになった。
- ・生徒をほめ、ますます高い目標に向かえるような声かけをするようになった。
- ・訳読せずに内容を理解させる手だてについて考え、実行するようになった。
- ・生徒が正しい文、節、句で答えられるような英問を心がけ、パラグラフライティングにつながるような指導をするようになった。
- ・ライティングの評価方法について研究し、考えを深めるようになり、生徒の実態に合った評価スケールを考案した。

今後の課題 (次の改善点など)

- ・達成できそうなゴールを、生徒一人ひとりに具体的に設定させる。
- ・授業中、また家庭学習において、継続的に書く機会を与えていく。
- ・授業中の活動をさらに発展させ、自分自身の状況や意見を表現する活動を取り入れる。

- ・ 3年次リーディングの指導のなかで、文章全体の構造に着目させ、エッセイライティングへとつなげていく方法を考える。
- ・ ライティングの指導は、時間もかかり評価方法にも難しい点があるが、だからといって敬遠することなく、継続することが大切である。学年全体で取り組んでいけるような方法を考える。

まとめ・感想

1年間の研修を通じて、教師としてまた学習者として多くの刺激を受けることができた。それぞれの学校が英語の指導において抱える課題について知り、情報を共有できたことは今後の教師生活の大きな財産となった。

英作文の指導方法、評価方法について悩むことが多く、明確な手だてをもっていなかったのが、今回のテーマとした。アカデミアでの研修で、評価方法についてのさまざまな事例に触れることにより、生徒の実態にあった評価スケールを考案することができた。また、毎回自分のエッセイの添削やアドバイスを受けることで、効果的な添削方法を会得することができた。音声による指導（リスニング、音読）のライティングへの効果は検証できなかったが、生徒の家庭学習や授業時の姿勢にそのプラスの効果が出ていると思う。

また、授業での実践以外に「学級日誌に一日の感想を英語で書く」という取組を行っている。これは自分のクラスでしかできないことだが、それなりの成果を上げている。生徒たちが懸命に辞書を引き、熱心に取り組む最大の理由は、「人に読まれるから」である。この学級日誌を用いた活動を通して、読み手を意識しながら自分の考えを表現する機会を与えることの有用性を実感している。

パラグラフライティングの優秀作品として自分の作文が紹介された生徒は、明らかに書く意欲が向上している。生徒が表現したものを発表する場を、今後さらに積極的に与えていこうと考えている。

授業改善にあたって参考にした資料等

荻野俊哉. (1998). 『ライティングのための英文法』 大修館書店

田中武夫・田中知聡. (2009). 『英語教師のための発問テクニック－英語授業を活性化するリーディング指導』 大修館書店

英作文の力を伸ばす英文日記の活用

科目名	英語 I	学年	1	形態	HR・習熟度・ 小集団
-----	------	----	---	----	--------------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

芸術科（音楽専攻・美術専攻）の1年生 26名

- ・真面目で、予習、課題などはほとんど全員がやってくる。
- ・ほぼ全員が、音楽、美術関係の大学進学を希望している。

解決すべき課題

- ・音楽、美術専攻ともそれぞれの専攻の専門科目が多いため、英語などの普通科目の時間が少ないのだが、実際はほとんど全員が大学を受験するので、大学入試に対応できる英語の実力もつける必要がある。
- ・週4単位（90分×2回）という限られた時間のなかで、読解、文法、リスニング、語彙など、広範囲の内容を扱わなければならないため、時間に追われ、教師主導の授業になりがちである。
- ・「読む」「聞く」という受動的な活動が多く、「書く」「話す」という主体的な自己表現活動を増やす必要がある。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

[英語を使ってどのくらい自己表現できるかについて調査]

実施時期 9月（前期期末試験後の授業中）

調査対象 当該クラス全員 26名

調査方法 生徒に10分時間を与え、S+Vを含む英文3文以上を使って日記を書かせた。

[結果]

ア) 2文以下しか書けない生徒	5名	19%
イ) 3文だが誤りが多い生徒	12名	46%
ウ) 3文で誤りがない生徒	6名	23%
エ) 4文以上で誤りがない生徒	3名	12%

[目標到達度]

この段階で、（次に設定する）改善目標（ウ+エ）に達している生徒は35%であった。

改善の目標

日常のできごとを、S+V の入った大きな誤りのない 3 文以上の英文で表現できる生徒が、クラスの 8 割以上になる。

改善のための手だて

手だての条件

- ・限りある少ない英語の授業時間のなかで、この改善目標のために充てられる時間を十分確保することはできないので、家庭学習の時間を利用したい。
- ・生徒が主体的に楽しんで取り組める活動にしたい。

手だての決定

- ・持ち運びやすい手帳サイズのノートを利用し、各自に英文日記を書かせることにした。

具体的な手順

- ・ノート配布 (15cm×10cm)
- ・参考資料配布 (日記の書き方、日記に使えそうな表現集など)

提出方法、頻度

- ・毎週月曜日に提出させ、木曜日に生徒に返却する。
- ・木、金、土、日のなかで 2 日～3 日分の日記を書く。

生徒の変化 (途中経過、事後の検証結果など)

指導初日

- ・日付、天気、気候など日記特有の表現の確認
- ・日記特有の形式の指導 1) 客観的な事実 2) より具体的な状況 3) 感想
- ・時制の指導 (原則的に過去形で統一)

10月、11月 (各月3回点検)

(考察)

- ・日記に興味をもって、一生懸命書いてくる生徒が多い。
- ・表現したいという意欲が英語学習につながっている。
- ・多くの生徒に共通する同じような文法上のミス (common errors) が多い。

be 動詞と一般動詞の両方を使ってしまう、時制に統一性がない、など

(途中の指導)

- ・授業中に生徒全体へ common errors を例示して指導した。
- ・生徒それぞれの英文の誤りは、すべて直すことはしないで、絶対に見逃せないような誤りのみ下線を引いて訂正した。
- ・英文で表現しようとする意欲を大切にして、励ますことを心がけた。

1 2月 検証アンケート実施（対象者：当該クラス生徒 26 名全員）

① 英文日記をつけてどのような変化がありましたか。（一つ選択）

- ・ 辞書を使うのに慣れた 38%
- ・ 書く内容を考えるうちに視野が広がった 23%
- ・ 英語を常に意識するようになった 19%
- ・ 英語の慣用表現を覚えられた 15%
- ・ その他 5%

② 英作文力をつけるために必要なことは何だと思いませんか。（複数回答可）

（上位回答内容）

- ・ 単語力をつける ・ 英文日記を続ける ・ 英文をたくさん読む
- ・ 英語に触れる機会をできるだけつくる

1 月 指導後の実力測定 [英語を使ってどのくらい自己表現できるかについて調査]

調査対象者、調査方法、調査内容は6月と同じ

[調査結果]

ア) 2文以下しか書けない生徒	1名	4%
イ) 3文だが誤りが多い生徒	7名	27%
ウ) 3文で誤りがない生徒	12名	46%
エ) 4文以上で誤りがない生徒	6名	23%

[目標到達度]

改善目標（ウ+エ）に達している生徒は約 70%であった。

教師の変化

- ・ 今回の授業改善のプログラムに参加することで、日頃当たり前と思っていた指導の方法をさまざまな角度から見直すようになった。
- ・ 小まめに生徒にアンケートを取ることで生徒のニーズや感じ方を正確に把握することができ、自分の授業に取り入れるべき指導法、逆に今までどおり継続すべき指導法などがわかり自信がもてた。

今後の課題（次の改善点など）

1月初旬の調査では「日常のできごとを、S+V の入った 3 文以上の英文で表現できる生徒が、クラスの 8 割以上になる」という改善の目標に一步届かず 7 割という結果だったが、年度末までの 2 か月を利用して、生徒の英文にみられる文法上の **common errors** を根気強く指導して目標の数値に近づけていきたい。

まとめ・感想

教育というものは数値では測りにくい領域であると思っているが、今回のように調査範囲を絞り込んで測定すると、生徒の学力の伸長や興味の推移がわかりやすい形で表れてくることを学んだ。改善目標は指導前の段階で達成率が3割5分だったものが、4か月の指導後には7割になった。目標の8割には到達できなかったが、授業改善のプログラムに参加し、通常の授業に少し改善の工夫を加えるだけで、数値が2倍になったことは大きな成果だと考える。

今回対象とした生徒たちは芸術科の生徒たちで、日頃から音楽や美術を通して自分を表現する訓練をしている生徒たちであるため、感受性が豊かであり、私が選んだ「日記帳を与えて、家庭で英文日記を書かせる」という方法は生徒たちの特性に合っていたと感じている。英文に添えてイラストを描いている生徒も数多くみられた。また、授業中に画用紙を配布し、日記のなかから1日を選んでイラストを書かせ、イラストを見せながらクラスの他の生徒たちに英文日記を披露する活動なども生徒たちには好評だった。授業の指導案を作る際には、生徒の現時点での実力、ニーズ、個性などをよく観察、把握して取り組むことが必要だと強く感じた。

今までも生徒の反応には敏感に対応して指導法などを工夫してきたが、今回の研修に参加することで、自分が学生時代にはなかったようなIT機器を使った指導法や、数値を使った授業改善成果の測定方法などを学べたことは大きな収穫だった。また、プログラムに参加している他の先生方の熱意や意欲も大きな刺激となった。この研修に参加させていただいたことに感謝するとともに、今後もより多くの教師がこのような研修に参加する機会を設定していただきたいと願っている。

授業改善にあたって参考にした資料等

吉田研作・白井恭弘.(2004).『My First English Diary ーきょうから始める英語3文日記』
コスモピア

自由英作文につながる文構造の段階的指導

科目名	ライティング	学年	2	形態	HR・習熟度・ 小集団
-----	--------	----	---	----	---

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

- ・2クラス3展開のなかの1グループで、文系、理系の混合グループである。
- ・男女比は6:4で、ほぼ全員が卒業後の進路は進学を希望している。
- ・授業態度は良好で、疑問点などはその場で解決しようとする姿勢をもっている。

解決すべき課題

穴埋め問題や選択問題に慣れてしまっているため、作文をすることを苦手とする生徒が多い。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・穴埋めや選択問題を中心とした問題演習への取組が非常に良好であった。

例) 次の()内に適当な関係代名詞を入れなさい。

- 1) No pictures () he painted won a prize.
- 2) An elephant is the largest animal () feeds on plants.

- ・英作文を中心とした夏休みの課題は、平易な文章であっても積極的な取組はみられず、英作文というだけで早々にあきらめてしまう生徒もいた。

改善の目標

クラスの半数以上の生徒が複数の文章を英語で作成する力を身につけ、まとまりのある文章が書けるようにする。

改善のための手だて

- ・まずは基礎学力が必要なので、5文型の理解と習得からさまざまな文法事項の学習を中心に授業を展開する。
- ・学力の定着を図るために、説明→問題演習を繰り返し行い、単元ごとにまとめの復習問題演習を実施する。
- ・学習事項を用いた簡単な文章を作る機会を増やす。
- ・修学旅行の感想文を英語で書かせることで、どの程度作文力がついたかを測る。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・授業における問題演習は穴埋め中心であったが、できるだけ文構造を意識させる問題演習を取り入れ、作文することへの苦手意識の改善を図る。

◎年度当初

例) 各組の文がほぼ同じ意味になるように、下線部に適切な語を入れなさい。

{ As I don't know his email address, I can't write to him.
_____ I _____ his email address, I _____ to him.

例) 日本文に合うように、下線部に適切な語を入れなさい。

万一明日雨が降れば、私たちは映画を見に行きます。

If it _____ rain tomorrow, we _____ go to the movies.

◎後期以降

例) 日本文に合うように空欄に適語を入れなさい。(____には複数の語が入ります)

1) Bill _____ . 「ビルは私に時計をくれた」

2) He _____ by bus. 「彼は時々バスで学校へ行く」

例) { _____ } のなかの語句を意味が通るように並べかえなさい

1) I { school / in Seattle / a / am / high / student } , Washington.

2) { baseball / a / became / great / the boy / player } .

- ・夏休みの段階では平易な文章でも躊躇していたのが、繰り返し問題演習を行うことで、苦手意識が薄くなり、演習の正解率も平均して7割を超えるようになった。
- ・11月に実施された修学旅行後に感想文を英語で書くという課題への取組も非常によく、少ない生徒でも60語、多い生徒では200語以上の文章を作文してきた。

(生徒の作文例)

I went to Malaysia for three days. I have experienced many valuables there.

First, it was difficult to speak English. I got an opportunity to talk with many Malaysians on the first day and the last day. But I couldn't speak English and I couldn't understand English soon. Sometimes I spoke with gestures, but I wanted to speak more English.

Second, it was beautiful. I saw many beautiful buildings and many plants in Malaysia. For example, the Palace, a Mosque and a hibiscus and so on. I saw the Palace and a Mosque for the first time. They were very beautiful.

Third, Malaysians were very kind. I met many Malaysians during this school trip. Malaysians were gentle. For example, a bus tour guide and a shop assistants. I had a lot of help from them. I won't forget it!

Before school trip I was worried to go to Malaysia. But after this school trip, these memories will be something pleasant to look back on.

Malaysia is a very good country!

(原文のまま)

教師の変化

- ・基礎学力の定着を図っていたころは、穴埋め問題のように平易な問題を数多くこなすことに重点を置いていた。
- ・文法事項を一通り学習した後は英語による作文を意識したため、選択問題や穴埋め問題よりも並べかえ問題や作文中心の問題演習へと切り替えた。
- ・文法事項についても細かい説明をせず、ヒントを与えて自分たちで解答を導き出せるような授業展開を心がけた。

今後の課題 (次の改善点など)

- ・日本語の意味を理解する力が不十分な生徒もいるので (例:「右手にメイプル劇場が見えるはずです」→主語が“メイプル劇場”になってしまったり、「見える」が“can see”ではなくて“see”になってしまったりする)、英文を作成した後、意味を確認するという習慣もつけさせたい。
- ・パラグラフライティングまでできるような力を身につけさせたい。

まとめ・感想

- ・本来ならば1年生で習得しているべき文法知識が、2年生になってもまだ定着していない生徒が多数みられたため、もう一度基礎的な学習を繰り返せざるを得なかった。もう少し基礎学力の定着を徹底すべきであった。
- ・同時に基礎学力が定着している生徒は、次のステップの学習が容易に行えたため、より応用的な問題演習に取り組むことが可能となり、成果が現れ始めた。
- ・2年次後半には英作文をこなすことも可能となり、過半数の生徒が日本文から英文への書き換えがスムーズに行えていた。
- ・作文する力がついてきたことで、英語自体への取組が積極的になってきた生徒も増え始め、学習意欲の向上につながっていると実感した。

段階的リーディングタスクの後の自己表現活動

科目名	リーディング	学年	3	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

男子 27 名女子 12 名、計 39 名のクラスである。学習に対する姿勢もよく、学年のなかでも比較的熱心に取り組む生徒が多い。大半が進学希望であるが、ほとんどが一般入試ではなく AO 入試や公募制推薦で受験するため、一般入試を意識している生徒は少ない。

解決すべき課題

- ・ 文法項目の学習に対する生徒の関心が低いと感じる。
- ・ 授業内の自己表現活動がほとんどない。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

このクラスは前年度よりラウンド制の導入を行ったクラスである。訳読式の授業から大きく変化させ、音読、黙読を組み込んだ段階的リーディングタスクによる内容理解を中心にし、文法については最後に確認するという進め方で授業を行ってきた。具体的にはラウンド 1 でトピックの選択、ラウンド 2 で日本語による質問、ラウンド 3 で英語による質問、ラウンド 4 で T/F 問題という流れで徐々に難易度を上げた課題に取り組ませることで本文に何度も触れさせ、文章理解を図ってきた。この方法に移行して 2 年目の今年度、ラウンド制の定着は確実なものになった。

しかし、この方法では、テキストを通じて触れた言語知識を生徒がみずから使ってみるという場面は皆無である。定着した授業スタイルを維持する一方、リーディングの授業とはいえ、生徒の自己表現力を高める活動も必要なのではないかとずっと感じていた。そこで、生徒が自己表現のために言語知識をどの程度使えるようになっているかを調べるために、2 学期のはじめに、1 学期に取り上げた比較的運用頻度の高い表現について空所補充形式の小テストを実施した。夏休みを挟んだせいもあり、残念ながら、39 名中 25 名が 0 点、平均点は 5 点満点中 0.3 点という結果になった。0 点の大半が白紙回答であり、得点率の平均は 6.4%であった。

改善の目標

教科書テキスト中のよく使われる表現を使った英作文問題で得点率の平均が 6 割を超える。

改善のための手だて

従来問題演習の形で取り上げてきた表現はほとんど定着していないことがわかった。また白紙回答の多さから、生徒の自信のなさやあきらめの気持ちが推察できた。そこで次のような手だてを考えた。

「比較的運用頻度の高い表現を用いて、英語で自己表現する活動を取り入れれば、生徒が積極的に自分の伝えたいことを表現することができるようになるだろう。」

具体的な指導としては、まず、ターゲットにする表現を使い、簡単な句、例えば、ターゲットの表現が“in order to～”（～するために）だとしたら、“in order to live”（生きるために）という句を作らせる。その時、to の後ろには動詞の原形が来るといった基本的な文法指導も入れる。次にこのフレーズを使って文を作る段階に移行する。ただし、主語+動詞のセットを作ることができない生徒が多いため、その必要性を指導したうえで、文の前半部分の作成を行わせる。

1 文をそのまま作文させることは負荷が大きいため、意味のまとまりや定型表現ごとに英語にさせるという指導が有効であると考えた。そうすることによって、文を作る過程での教師からの助言は生徒に理解されやすく、その効果も高くなることが期待できると思った。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

今までの授業は読解活動が中心だったので、受け身的な姿勢で授業に取り組んでいる生徒が多かった。文法や表現の解説にはあまり興味を示さず、練習問題にも消極的な生徒が非常に多かった。しかし、授業内で扱った表現を使って自分でオリジナルの文を作るとなると、必要な単語について教師に質問したり、調べたりするなど、授業に対して積極的、能動的に取り組む姿勢がみられた。

定期テストに「与えられた表現を使って英作文を書く」という問題を出題した（2点×6問＝12点）。採点基準については、授業で重点的に指導してきた項目を反映させ、以下のようにした。

①	文章として成り立たないもの(主語+動詞のないもの)	2点減点
②	冠詞の欠落	1点減点
③	複数形-sの欠落	1点減点
④	動詞の三単現-sの欠落	1点減点
⑤	be動詞の変換ミス	1点減点
⑥	前置詞の誤用	1点減点

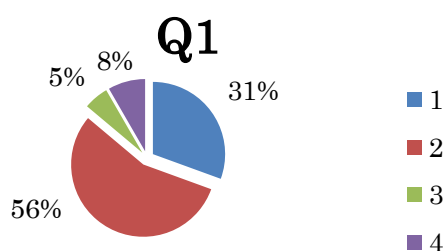
このテストの結果（得点平均と得点率平均）を、事前に行った空所補充形式の小テストの結果と比較した。

	2学期はじめ 小テスト（5点満点）		2学期期末テスト英作文問題（12点満点）	
	得点	得点率(%)	得点	得点率(%)
平均値	0.32 点	6.4 %	6.79 点	56.6 %

得点の平均値および得点率ともに飛躍的に向上した。得点率は 6.4%から 56.6%と 9 倍近い数字が出た。残念ながら目標値であるクラス得点率の平均が 6 割を超えるという目標は達成できなかったが、それに近い数字まで引き上げることができた。結果的に 0 点になった生徒が 4 人いたが、いずれも白紙回答ではなく、全員の生徒が問題に取り組み、何らかの回答をしたのである。前回の結果と比べると、数字だけではなく、取り組む意欲にも大きな変化が表れた。それは以下の学期末アンケートの結果からも確認することができた。

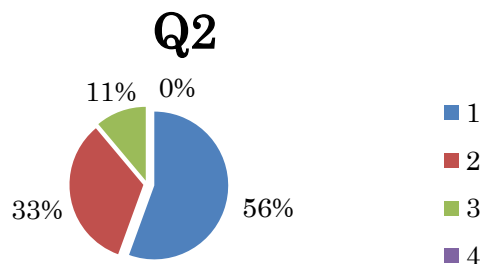
Q1 Key Expression を用いてオリジナル文を作る活動を面白いと感じましたか。

1. 面白いと感じた
2. どちらかといえば面白いと感じた
3. どちらかといえばつまらないと感じた
4. つまらないと感じた



Q2 オリジナル文の活動は Key Expression を覚えるうえで役に立つと感じましたか。

1. 役に立つと感じた
2. どちらかといえば役に立つと感じた
3. どちらかといえば役に立たないと感じた
4. 役に立たないと感じた



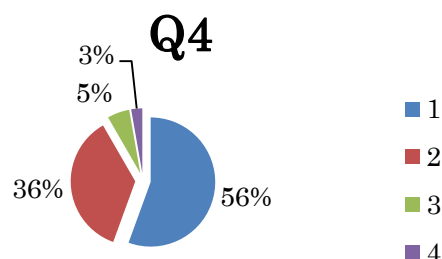
Q3 オリジナル文の活動でどのようなことに対して意識が高まりましたか(多肢選択・複数回答可)。

①	「主語+動詞」を含む英語の語順	17人	(47.2%)
②	作文で取り上げる Key Expression	16人	(44.4%)
③	動詞の活用	10人	(27.8%)
④	前置詞	10人	(27.8%)
⑤	冠詞	4人	(11.1%)
⑥	名詞の単数・複数	6人	(16.7%)
⑦	必要な単語を調べる(聞く)こと	14人	(38.9%)
⑧	その他	0人	(0%)
⑨	特に意識が高まったことはない	9人	(25.0%)

(回答者数：36)

Q4 授業のなかでこのような自己表現活動は必要だと思いますか。

1. 必要だと思う
2. どちらかといえば必要だと思う
3. どちらかといえば必要ないと思う
4. 必要ないと思う



教師の変化

今まで自作のハンドアウトによって、ある程度授業の方向性や生徒の動きをコントロールしていたが、この英作文活動を行うことで、生徒からの予期せぬ質問に対応しなければならない場面が多くなった。生徒の多様な自己表現のニーズに応えるため、生徒が使うであろう表現を事前に

予測し、準備しておくことが教材研究として加わった。そして、教科書で明示的にターゲットとされている文法項目が、生徒が書きたいと思う英作文に最適であるとは限らないので、教師がテキストのなかで使われているあらゆる表現に注意を払い、運用度という面から教材を分析し、掘り出し、切り取るという作業が必要になった。自分のなかでのこのような教材観の変化は、今後他の科目の指導にも生きてくると思う。

何よりも、生徒からの質問も増え、授業が活性化したことで、生徒とのコミュニケーションが以前よりスムーズになり、授業に行くのが楽しみになった。

今後の課題（次の改善点など）

今回の授業改善のテーマはリーディングの授業における自己表現活動の改善であった。この実践では「書くこと」による自己表現をねらいとしたが、さらに「話すこと」にも発展させることが今後の課題である。新学習指導要領は同一科目内で4技能のすべてを向上させることを目標としており、今後、教科書教材を用いた「聞く」「話す」「読む」「書く」のバランスのとれた能力の育成は必須である。自分の考えを話したり、書いたりするための指導は、今後ますます求められるだろう。今回のように指導方法に少しの変化を加えるだけで、このような大きな変化を生むことができたことで、今後の授業改善に大きな可能性を感じた。今後は話す能力の育成に向けてさらなる授業改善に取り組みたいと考えている。

まとめ・感想

今年度1年間本研修を受講し、まず一番に得たものは「変化に対する勇気」である。授業を年度のはじめに構成してしまうとその型からなかなか抜け出すことができなかったが、自分の授業を客観的に分析し、何が充実しており、何が乏しいのかを見つけることができた。「授業改善」と聞くととても大きなことをやらなければいけないと思いがちであるが、改善とは日々の授業の積み重ねなのだとは強く感じさせられた。今回は、ハンドアウトや言語活動のなかのたった一つの「変化」が結果として大きな具体的成果につながった。躊躇して取り組んでこなかった部分に踏み出したことで、数字で表れるもの以外に、生徒と教師の間のコミュニケーションが充実するなど、付随して現れる効果も生まれた。

同時に、年度の途中で変化を加えることにある程度の限界も感じた。今回は日程的なこともあり、年度途中からの授業改善になったが、学年が変わる時期、さらには生徒が入学し、1年生を担当する時期に授業改善を試みるのが最も効果的であろうと感じた。日々の授業内の改善の意識を、年度、学年を見通した改善の意識に転換することが大切であると思う。そのような視点で授業を見れば、生徒に3年間の英語の授業でどのような力を身につけさせたいか、という到達目標が必要であると思えてくる。この反省と発見を次年度以降、また次の勤務校での実践にもつなげていけるようにしたいと考えている。

授業改善にあたって参考にした資料等

門田修平・野呂忠司・氏木道人(編著). (2010). 『英語リーディング指導ハンドブック』大修館書店

多様な言語活動による「英語で進める授業」

科目名	英語 I	学年	1	形態	HR・習熟度・小集団
-----	------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

個性化コース（基礎）の生徒たちで、総数は 20 名（男 3 名 女 17 名）である。基礎コースということもあり、生徒たちの英語力は標準レベルから基礎レベルまでと幅が広いが、全員前向きであり、表現することが好きで、学習意欲も高く活発でなごやかな雰囲気のクラスである。ほぼ全員が将来は大学進学希望である。1 時限 90 分単位の授業である。

解決すべき課題

普通の英語 I の授業は、テキストの難しさから、日本語による一方的な授業になりやすく、生徒の英語のスピーキング時間がきわめて少なくなっている。音読活動も機械的なものになりがちで、生徒たちのインタラクションが少なく、そのために学習意欲が低下する傾向にある。また、文法学習の時間についても、説明後に各自にターゲットの文法事項を使った例文を 2、3 文作らせる程度で、やはりインタラクションや発話の機会を与えられていない。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

4 月の最初の授業で、ニーズ分析として英語の 4 技能に関する事前のアンケートをした際、ほとんどの生徒が英語を話せるようになりたいと答え、スピーキング活動への希望がとても多かった（「英語をわかるようになりたい」と「入試問題ができるようになりたい」などの文法やリーディングへの希望が次に続いた）。そのような生徒の希望や 90 分授業の長さも考慮し、授業のなかに必ずスピーキング活動を入れるようにしてきた。しかし実際には、シラバスに追われながら、基礎力が十分でない生徒たちにも、難易度の高いテキストで内容理解や文法事項の学習をさせなければならない状況で、日本語での説明がほとんどを占める、旧態依然とした英語 I の授業になりつつあった。

今後の授業への要望を生徒たちにインタビューするなかで、「もっと英語を使いたい」とか「もっと英語の活動を増やしてほしい」という声を耳にし、生徒たちが実際に英語を話す時間を授業中の発話の半分くらいに増やしたいと考えるようになった。また、文法説明の時間などに無理に英語を使おうとして日本語と英語が混じりあうことが多く、かえってわかりにくくなるという指摘を生徒から受けた。

改善の目標

英語 I の授業において、教師と生徒の授業中での英語を話す時間の割合が、それぞれの発話全体の 50%以上になる。

改善のための手だて

- ・教師みずからがいつも授業で英語を話せば、英語を話しやすい雰囲気になるだろう。
- ・意味のあるインタラクティブな音読活動をすれば、生徒の英語を話す意欲も向上するだろう。
- ・英語と日本語の頻繁な切り替えによる混乱を防ぐために、英語を話す時間と日本語を話す時間をはっきり分ければ、生徒は英語を聞きやすく、かつ話しやすくなるだろう。
- ・できるだけ多くのターゲットの英文法を使った英文を生徒に作らせ、話させることによって、生徒の学習意欲も向上するとともに、文法事項の定着も進むだろう。
- ・体や想像力を使って表現するスピーキング活動をすれば、ことばと体の動きの一致と、能動的言語学習によって、言語知識が記憶に残りやすくなるだろう。
- ・英語の発話の時間を増やすことによって、90 分の授業にメリハリがつくとともに、生徒の学習意欲も向上し、英語の時間が楽しいと感じるだろう。
- ・異文化理解のための学習のなかで、スピーキング活動を導入すれば、異文化への関心と自己表現の意欲が高まるだろう。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・授業のはじめの出席確認から英語で返事をするので、英語を話す雰囲気ができた。
- ・音読の際に、お互いに感情を入れて読ませたり、それを当てるゲーム風にしたり、お互いが読む際に片方が通訳者になり日本語で（可能なら英語で）簡単にまとめたりと、音読にインタラクティブを加えることによって、活動が活性化し、その雰囲気のなかでお互いに英語で感想を言い合える雰囲気ができるようになった。
- ・英語と日本語の時間をはっきり分けることによって、混乱することがなくなった。
- ・文法定着のための言語活動にドラマ的な手法（演技しながら英語を使う活動など）を入れたことで、練習量が増えるとともに、創造性を発揮することができ、楽しい雰囲気のなかで積極的に英語を話すようになった。
- ・ことばと体の動きを一致させる活動によって、アクセントに注意して発音するなど、表現力や創造性を発揮するなかで、単語や表現を覚えやすくなった。
- ・スピーキング活動を増やすことによって、授業が活性化し、生徒たちの学習意欲も向上した。
- ・はじめの挨拶を毎月違う言語で行うことによって、英語以外の外国語に興味をもたせられた。
- ・各課のテーマについて、日本と違う他の国の価値観を意識させることによって、生徒たちの異文化理解の意識を向上させることができた。

12月の生徒へのアンケートで、60%の生徒が、普段の授業で全体の発話の半分以上を英語で行っていると自己分析できるまでになった。

教師の変化

- ・普段から英語を使うことを意識するため、自然と英語力の向上につながるとともに、自分の英語力を高める必要を感じ、今まで以上に努力するようになった。
- ・生徒に創造的な活動をさせるためには自分の創造力も鍛えねばならず、教材研究をいっそう充実させるとともに自分の感性を磨く努力もするようになった。
- ・90分授業の構成に関して、スピーキング活動などの英語を使う活動と、おもに日本語による活動（説明など）のメリハリを今まで以上に明確にしなが、工夫するようになった。
- ・普段の忙しさのなかで、ドラマ的な手法は特別な教材を用意する必要がなく、教科書を活用できるため、とても効率的だと感じ、ドラマ的手法をさらに勉強するようになった。
- ・異文化を教えるには自分自身が文化的な題材にいつもクリティカルである必要があり、自己研修への意欲が向上した。

今後の課題（次の改善点など）

- ・みずからの英語力を向上させるとともに、創造的な言語活動を考えるために自分のもっている引き出しをより増やす努力が必要である。
- ・1年という長いスパンのなかで、それぞれの課や活動の特徴にあったスピーキング活動を考える必要がある。
- ・スピーキング活動は活性化したが、今後は生徒の話す英語をモニターして、より正確に話せるように指導する手だてが必要である。
- ・今後の「コミュニケーション英語」の導入に鑑み、4技能を統合させながら指導できるスピーキング活動が必要である。
- ・異文化理解の根本はクリティカルシンキング（critical thinking）だと考えるので、その育成のための指導法が課題になると思う。

まとめ・感想

異文化理解能力の養成に興味をもっていたが、数量分析のできる課題として、普段必要だと感じている今回のテーマを自分の研究テーマとしてみた。すると、改めてスピーキングの奥深さと面白さに興味をもち、このスキルの育成についてももう少し本気で調べてみたいと考えるようになった。英語の授業を本当の意味で活気づかせ、英語の授業らしいと生徒に感じさせるものは、やはりスピーキング活動であり、それは今回の生徒のアンケートで全員が「英語を話せるようになりたい」と書いていたことからわかる。「英語の授業は原則すべて英語で」という風潮のなかで、このテーマは異文化理解の観点からも自分なりに考えるところも多く、今回の実践を通して英語

と日本語の使用をはっきり分けることは有用だと感じた。今後はこの研究テーマを個人的に深めていくとともに、どうすれば英語教育のなかで多様な文化についての理解を促進できるかも考えていきたい。

最後に、今回の研究で絶えず助言と励ましを暖かく与えてくれた、アカデミアのスタッフの方々に心から感謝したいと思う。

授業改善にあたって参考にした資料等

Almond, M. (2005). *Teaching English with drama*. London: Modern English Publishing.

Byram, M. (1997). *Teaching and assessing intercultural communicative competence*. Clevedon: Multilingual Matters.

ELEC 同友会英語教育学会実践研究部会編著. (2008). 『段階的スピーキング活動 42』 明治図書

Ellis, R. (2003). *Task-based language learning and teaching*. Oxford: Oxford University Press.

Hughes, R. (2002). *Teaching and researching speaking*. London: Longman.

Jenkins, J. (2003). *World Englishes*. London: Routledge.

英問英答から始める、生徒の発話を促す授業

科目名	英語 I	学年	1	形態	HR・習熟度・小集団
-----	------	----	---	----	------------

クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

本実践の対象クラスは1学年7クラスのうちの1クラス（男子22名、女子18名）である。単語の発音練習、音読練習などには積極的に取り組むが、授業中に発言する生徒は限られている。ほぼ全員が4年制大学への進学を希望しており、クラスの85%以上が部活動に加入している。

解決すべき課題

授業で生徒が英語で発言する場面がほとんどない。

事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

この授業実践の目的は、「どのように工夫したら、生徒が英語で発言するようないきいきとした授業になるか」である。そこで、「英語で発言させるための手だてを適切に行えば、生徒が英語で発言するようになるだろう」という仮説を立てて実践研究を行った。担当しているすべてのクラスで同じ実践をしたが、特に対象クラスには「授業で英語を聞いたり話したりすることにどのような効果があるのか」ということについて明示的に説明をして実践を行った。

まず、生徒の現状を調査するためにアンケートを実施したところ、以下の結果を得た。

英語で質問されることを楽しいと思うか そう思う 22/40名 (55.0%)

質問されるのが楽しくない理由の1位は、「質問が理解できないから」

英語の質問を聞いて、その内容が理解できるか そう思う 24/40名 (60.0%)

理解できない理由の1位は、「単語が難しいから」「質問の内容が難しいから」（同数）

先生の質問に英語で答えることが楽しいと思うか そう思う 19/40名 (47.5%)

楽しくない理由の1位は、「みんなの前で答えるのが嫌だから」

英語で質問に答えることが易しいと思うか そう思う 9/40名 (22.5%)

難しいと感じる理由の1位は、「単語なら答えられるが、文では難しいから」

授業中、質問に英語で答えることが自然なことだと感じるか そう思う 37/40名 (92.5%)

このアンケートから、生徒は英語で質問されることよりも、質問に英語で答えることに対して戸惑いがあり、その原因は「英文の形で答えるための十分な知識がなく、答える自信がないから」と推測することができた。また、ほとんどの生徒が、英語で答えることは自然なことだと感じているので、手だてを工夫すれば、生徒の英語による発言を増やせるだろうと考えた。

改善の目標

英問英答の活動に対応できる生徒がクラスの5割以上になる。

改善のための手だて

- ・授業で英語を聞いたり話したりすることの意義を事前に説明すれば、意欲的に生徒が発言するようになるだろう。
- ・教師が原則的に英語を使って（文法の説明以外、基本的にはすべて英語で）授業を行えば、生徒も発言するようになるだろう。
- ・自己評価を週1回行い、生徒の発言回数を記録すれば、意欲を維持させることができるだろう。

生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

自己評価表を集計し、その週の授業中に英語で発言した生徒の人数の推移を観察した（表1）。

（表1）英語で発言した生徒数（40名中）とその割合

	対象クラス	他の担当クラス
1週目	13 (32.5%)	実施せず
2週目	11 (27.5%)	12 (30.0%)
3週目	15 (37.5%)	10 (25.0%)
4週目	11 (27.5%)	6 (15.0%)
5週目	8 (20.0%)	9 (22.5%)

表1からわかるように、授業中に英語で発言した生徒数は5割を超えず、目標を達成することはできなかった。他の担当クラスと比較しても、発言した生徒数はともに減少傾向であったことから、生徒に対し英語で発言することの意義を事前に説明することは、特に授業中に英語で発言することを促す有効な手だてとはならなかったと推測できる。

なぜ英語で発言する生徒が5割を超えなかったのかを詳しく調べるために、原則的に英語で進める授業に対する生徒の気持ちの変化について、事前事後のアンケート結果を比較して検証した。

英語で質問されることが楽しいと感じられるようになったか そう思う 22→24名 (60.0%)

質問されることが楽しくない理由の1位は、「質問が理解できないから」で変わらなかったが、「英語で答える必要のない質問だから」という回答が減少した。

英語の質問を聞いて、その内容が理解できるようになったか そう思う 24→31名 (77.5%)

理解できない理由の1位は「単語が理解できないから」で変わらなかったが、事前アンケートで同数1位の「質問の内容が難しいから」という回答が減少した。

質問に英語で答えることが自然だと感じられるようになったか そう思う 37→31名 (77.5%)

これらの結果から、生徒は英語で進める授業に慣れてきて、英語の質問が理解できるようになったということが推測される。実際に原則的に英語で授業を進めるにあたっては、教科書の内容理解を英問英答で行って発言を促したり、その質問もできるだけパラフレーズし、板書したりするなど生徒が発言しやすくなるように工夫をしたので、その点が「質問されることが楽しく」「理解できるようになった」という数値の改善に反映されたのではないと思われる。一方、「質問に英語で答えることが自然だ」という値が改善せず、英語での発言も5割という目標に達しなかったことから考えると、授業内に行った工夫だけでは生徒に発言を促すまでには至らなかったといえる。つまり、授業内で生徒が英語で発言するためには、発言を促すさまざまな工夫に加えて、英語で発言する必要がある言語活動を導入するなど、今まで以上に英語で受け答えすることが自

然になるような雰囲気づくりが必要であることがわかった。

参考までに、英語で進める授業の実施によってテストの点数に影響が出るかどうかを調べるために、実践前後の定期テスト（学年共通問題）のクラス別平均点を比較した（表2）。

（表2）実践前後の定期テスト平均点と学年（7クラス）のクラス順位

	対象 クラス	他の担当 クラス	クラス A	クラス B	クラス C	クラス D	クラス E	学年平均
Test 1	59.9(3)	60.7(1)	56.1(5)	53.9(6)	53.7(7)	56.9(4)	60.3(2)	57.4
Test 2	68.4(4)	70.3(1)	66.3(6)	68.8(3)	62.0(7)	66.5(5)	69.6(2)	67.4

対象クラスの順位は一つ下がったものの、両テストにおいて学年の平均点を上回った。他クラスと比較すると、原則的に英語で授業を進めることで、生徒の学習内容の理解にマイナスの影響が出ることはなかったと考えることができる。むしろ英語のインプットとアウトプットの面から考えると、授業を英語で進める方のメリットが大きいといえるだろう。

また、生徒の英語で進める授業に対する評価と取組の変化についてアンケートで質問した（回答者数：40）。

英語を主に使った授業のやり方はよいと思うか

とてもそう思う 11名(27.5%) そう思う 25名(62.5%)

あまりそう思わない 3名(7.5%) 全くそう思わない 1名(2.5%)

英語での質問や内容理解を中心とした授業で、自分のなかで変わったところはどれか

（多肢選択・複数回答可）

予習の習慣	10名(25.0%)	復習の習慣	9名(22.5%)
英語の発言意欲	11名(27.5%)	自主的学習態度	8名(20.0%)
教師の話への集中	26名(65.0%)	相互学習の機会	8名(20.0%)
メモを取る習慣	13名(32.5%)	集中力・意欲の喪失	2名(5.0%)
語彙・文法の学習意欲	21名(52.5%)		

クラスの9割の生徒が英語で進める授業を肯定的に捉えており、半数以上の生徒が「先生の話を中心して聞こうと思うようになった(26名：65.0%)」「単語や文法の学習をさらにしようと思った(21名：52.5%)」といった学習態度の向上を自覚している。

それに対し、この実践で目標にしてきた「英語で発言しようと思うようになった」という項目を選んだ生徒は11名(27.5%)にとどまっていることから、英語を聞いたり、単語や文法を理解しようとしたりする態度を育成するだけでなく、学んだことを活かして発言することができるような活動の工夫がさらに必要であると感じた。

教師の変化

今までは、英語で授業を進めると生徒が混乱し、学習をあきらめてしまうのではないかとこの恐怖感や、きめ細かく教えられないのではないかとこの不安感をもっていたが、実践後のアンケート結果を見て、自分の恐怖感や不安感が解消された。特に、「先生の話を中心して聞こうと思うようになった」「単語や文法の学習をさらにしようと思った」の項目を選択した生徒が半数以上に上ることから、英語で授業を進めることの意義を自分なりにつかむことができた。

今回の実践では、英問英答の活動を中心に英語で授業を進めてきたが、英語で授業をすること

のよい点は、生徒の理解度を探りながら授業を進められることにあったと感じる。実際に、教科書本文の内容を生徒に説明するときには、理解の度合いに応じて本文の内容をパラフレーズしたり、わかりやすい例示をしながら説明したり、英問英答させる時には、質問を板書したりして授業を進めたのだが、そうすると生徒はさらに集中して話を聞き、発言しようとする意欲も高まっていくのを感じることができた。また、生徒に配布するハンドアウトの指示文も英語で書いたり、毎回授業で辞書を引かせて語彙力を身につけさせたりなど、生徒が少しでも英語に触れる時間と量を増やして、英語で発言しやすくなるように工夫をするようになった。そのおかげか、最初は不慣れだった生徒もしだいに質問に答えることができるようになり、特に実践後半の授業においては、みずから挙手して発言する生徒も出てきたので、生徒とのやり取りを通じて双方向的な授業もできるようになった。これからも恐れずに英語で授業を進めて、自分なりの指導法を発展させていきたいと感じている。

今後の課題（次の改善点など）

生徒の学習意欲を高めることに留意しながら、今後も英語で進める授業を行い、生徒が自然に英語を使うことのできる授業を目指したい。そのために英問英答だけでなく、生徒が英語を使うさまざまな言語活動の充実を図るとともに、基礎的な学力や単語力を定着させて、生徒が自信をもって学習できるようにしていきたい。また、自己評価や発言のポイント制などは評価に組み込んで、生徒が積極的に参加する活気のある授業づくりに努めていきたい。

まとめ・感想

この授業実践を行うまでは、自分の英語力に自信がなく、また自分の指導法についても確立されたものがなく、非常に不安を抱えていた。しかし、この授業実践で少しずつ自分らしい指導法をつくることができたのを実感した。生徒もしだいに英語での説明に慣れてきて、自分から辞書を引いたりする生徒が出てくるなど、授業が徐々に活動的になったと感じる。研修で、英語を話す環境に身を置くことができ、それが教室で英語を話す自信につながったので、これからも積極的に英語で進める授業を展開して、生徒が英語で発言できるようないきいきとした授業を目指したい。この授業実践を行ったことで、自分の授業における課題が発見でき、それを短期間で修正することができたことは、非常に有意義であった。

授業改善にあたって参考にした資料等

- 清川英男・濱岡美郎・鈴木純子. (2003). 『英語教師のための Excel 活用法』 大修館書店
- 中山晃. (2001). 「英語の授業中における自己評価の学習者動機への影響」『国際基督教大学学報. I-A, 教育研究』 第 43 号 <http://ci.nii.ac.jp/naid/110007054464> (2012/01/30 アクセス)
- 大屋和彦. (2005). 「英語授業における効果的なアウトプット活動について」『島根県教育センター研究紀要』 http://www.pref.shimane.lg.jp/matsue_ec/chousa_kenkyu/17nendo.data/h17-5.pdf (2012/01/30 アクセス)
- 埼玉県高等学校教育課程改善委員会教科「外国語」検討部会. (2009). 『教育課程改善委員会教科「外国語」検討部会報告書』 生徒用アンケート <http://www.pref.saitama.lg.jp/uploaded/attachment/404905.pdf> (2012/01/30 アクセス)

平成 23 年度 英語教育アドヴァンスト研修
授業改善プロジェクト 報告書
ーアクション・リサーチによる高等学校英語授業の実践ー

発行日 平成 24 年 3 月 31 日
編 集 神奈川県立国際言語文化アカデミア
(担当) 村越 亮治 江原 美明
発 行 神奈川県立国際言語文化アカデミア
横浜市栄区小菅ケ谷 1 丁目 2-1
TEL 045(896)1091
